

を名告り、伊吹の伊に久國の久を合せ、文字をかえて意休と別名し別館に住居ける。かくて瀬次郎助六兄弟は急ぎ別館に來りければ、意休ふかく喜び酒肴を設けてもてなしつゝ、われ少しく心歡びのことあれば、兄弟を招きしなり。まづ心よく一盃を酌むべしといふに、瀬次郎助六聲を等しくなし申しけるは、仲父君にもかねて知らせ給ふごとく、今日六月なかばなれば、主君よりあづかりたてまつる蛇形丸の寶劍をはじめ、そのほか種々の寶器に風を入るゝ當日なれば、しばしの暇なけれど、仲父君の俄にまねぎ給ふにより、若し如何なる變事もやと思ひ直ぐし推して參り候ふなり。宣ふごとくならんには、明日こそ參りてゆるやかに御饗應を受くべしと云ひければ、意休席を丁とうち、いかに今日蟲ぼしのあることをわれはたと忘れたり。さもあらばあれ、

家には羽川專平あれば、氣づかはしき事もあるまじ、先つ一ぱいを傾けて後歸りねと、ひたもの薦めければ、日頃より仲父を敬ふこと親に仕ふまつるがごとき兄弟の性ゆるゑ、いなみもやらず酒席につらなりける。此をり夕立雨しとく降りいで、漸く暮におよび小止をまちてぞ別れけり。意休も橋近うおくり出で、四方を眺望なすに、夏月東天にのぼり、銀河斜にして涼風吹きわたり、笹をめぐる水の音心ほそく、わすれては秋かと思ふと獨語ちけるが、今迄かしがましく鳴きたる蛙、俄に聲を止めたるを聞き、莞爾とうち笑み、あら心よやさては我大望とゝのひしと覺えたり。時分はよきぞ疾く出でよと、暗號と覺しく指にて椽板をはじきならせば、下屋より這出る、曲者あり。これ則ち意休が白齒者閑寺門平といふ惡棍なり、門平わきばさみたる寶劍の箱を



意休が前に差出し、袖袂の雫を絞り、さても君の命じ給ふごとく、氷
 上家の庭先にしのび居て便宜を覗へば、折よく専平は關屋と二人茶房
 にありて、しばし寶劍の守護を怠りしその間に、盗み去らんとする折
 しも、専平立歸りて我を見とがめ、關屋と共にさへざりといめしかど、
 辛うじて其場をきりぬけ候と刀箱を差し出せば、意休うち笑み傳聞く
 此寶劍に一度水を注ぐときは、こともなく小蛇の形あらはるゝによつ
 て蛇形丸と名づけ、まつた先までかしましく鳴きつる蛙の俄に聲をと
 いめしも、此寶劍の威徳なり。そがゆるる汝首尾を仕すまし、下屋まで
 立歸りしをわれよく知れりと、劍を抜きはなし燈下へさしつけ見れば、
 光は浪の湧くごとく、鉦は星を連ねるに似たり。意休ますます喜び、
 わが謀計のそのもとを見すべしとさし出すを、門平取り上げ見れば、

關屋より専平へおくりし艶書なり。意休かさねて云ふは、われ此頃こ
 の文を拾ひえて一計を思ひあたり、今日蟲ぼしを心つかざる面持にて、
 兄弟をわが家に招き、その使を關屋にいひつけ、妹あや瀬もかしこに
 あれば、日暮るまでは苦しからじ、緩やかに物語りなせと心をゆるま
 せしが、果して魚は餌の香しきをよろこびて、計あることを知らず。
 さしも智ある専平すら、關屋が色香にまよひ、寶劍の守護懈りしなら
 ん、秘すべしと説終るをり、門慌立しくうちならじ、仲父君に申
 すべき事ありと瀬次郎が聲なしければ、門平はもとの下屋に忍び、寶
 劍を琴匣に入れておしかくす。程なく瀬次郎つと入り來り、仲父君大
 變ありと吐息して、後はいひも出さず、十方にくれて口籠れば、意休う
 ち驚きし態をなし、そは如何なる變事あり氣遣はし、疾く聞かんと膝

をすゝむ。瀬次郎胸をうつて、過刻弟助六もろとも家に歸りしが、はや暮すぐれど燈もかゝげず、たゞ女のさめぐくと泣聲のみ聞えしかば心いられて裡に入るに、専平諸肌おしぬぎて、切腹なさんず面持なるを、關屋あや瀬、左右より手にすがりてひたふる止むるなり。こは狂氣なしけるかと、中刀をもぎ放ち由縁を問へど、頭をたれて一言半句の答もなさず、關屋をせめとひ首尾を聞きはつるに、思ひきや、専平かねて關屋と私情を通じありしとやらん、その間に何ものとも知らず蛇形丸の寶劔を盗みさり、剩へ曲者の貌さへ見きはめざれば、分明分説なしと又刀に手をかけて自害せんず形勢なれば、助六もろともおし止め、狼狽しや専平おのれ一人腹切とて、氷上の家の落度とならざるにもあらず、一先づ白地に主君へ謬を申しあげ、寶の僉義なさん

と忠とも義ともいふべきと、理をつくせどもなほとゞまるまじき光景なれば、助六を殘しおき此變事を告げ候なりと、いきまき荒くいひければ、意休は聞く如に肝つぶれし趣にて差添をぬきはなし、南無と一聲わき腹へ突立てんとす。瀬次郎周章で抱き止め、こは仲父君何故の御生害ぞ、まづ事の由を語り給へとはなたざれば、意休ほといふ息をつき、何ゆゑとは淺はかなる問ごとや、今日寶物の蟲干をうち忘れ、兄弟をまねき斯かる珍事を引出すはこれ一生のあやまちにて、我手をおろして盗むも同じ。助六其方はともあれ、曾根太郎へ何と分説なすべきぞ、とくはなつべしといらだてば、瀬次郎忙はしくいふは、こは仲父君にも物にばし狂ひ給ふか、先に専平にもいふごとく、ひとまづ義實公へ事の由つゝまず申しあげ、活くるも死ぬるも主命にまかすこ

と、士たる者の本意なり。切腹なしてことすまば、我こそさきに生害
 せんと疊を叩いて辱しむれば、意休もむべなりとや思ひけん、差添靴
 におさむるを見て、瀬次郎少し心を安んじ、意休が従者を呼出し、も
 し御自害あらん形勢ならば、止めまゐらせよと私にいひつけ、家路を
 さして立歸るを、意休微笑みて後影を見やり、明日は必定しはり首を
 刎らるべし。その寶劔はこれにあり、知らざるこそ佛菩薩なりと一人
 ごち、門平には厚く賞金をあたへける。扱も瀬次郎は家に歸り、白濱
 に人をはせて曾根太郎を呼びむかへ、兄弟三人額をあつめて商義なし
 けるが、外にはからふ手だてもなく、一伍一什を主君へ告奉り、よき
 に罪をこひければ、義實聞し召し如何んせん三種の神寶さへ一度西海
 の浪に没しぬ。尤も先祖より傳はりし寶劔を失ふは、その咎輕からぬ

ど、今彼らを罪すとも、寶劔の行方しるゝともあらず、一度彼らが
 罪をゆるし、寶の詮義をいひつくべし。殊に曾根太郎は城中にあつて、
 家の變事をしらざれば、いさゝかも罪なしと兩人の所領をも曾根太郎
 にあづけ給ひぬ。瀬次郎助六はさらなり、專平關屋も活かへりたる心
 地なし、かくまであつき君の御惠骨に彫り肝に銘じて忘れ候らはじ、
 縦令劔のむしろに臥し、火惱の臺に上りてなりと撈出さでおくべきか
 と、四人ひとしく喜びけり。次日に至り義實公より初鹿速水之助とい
 ふ士をして、瀬次郎助六を國さかひより追はらふべきよし命じ給ひ、
 はた寶劔を撈出すに置ては本領安堵たるべく、御墨付をくだし給ひし
 かば、かしこみて御請なし、何地をあてと定めもなく專平關屋もろと
 もに出行きぬ。曾根太郎意休も國さかひまで送りきて、若し假栖もさ

と、士たる者の本意なり。切腹なしてことすまば、我こそさきに生害
 せんと疊を叩いて辱しむれば、意休もむべなりとや思ひけん、差添鞆
 におさむるを見て、瀬次郎少し心を安んじ、意休が従者を呼出し、も
 し御自害あらん形勢ならば、止めまゐらせよと私にいひつけ、家路を
 さして立歸るを、意休微笑みて後影を見やり、明日は必定しぼり首を
 刎らるべし。その寶劔はこれにあり、知らざるこそ佛菩薩なりと一人
 ごち、門平には厚く賞金をあたへける。扱も瀬次郎は家に歸り、白濱
 に人をはせて曾根太郎を呼びむかへ、兄弟三人額をあつめて商義なし
 けるが、外にはからふ手だてもなく、一伍一什を主君へ告奉り、よき
 に罪をこひければ、義實聞し召し如何んせん三種の神寶さへ一度西海
 の浪に没しぬ。尤も先祖より傳はりし寶劔を失ふは、その咎輕からぬ

ど、今彼らを罪すとも、寶劔の行方しるゝともあらず、一度彼らが
 罪をゆるし、寶の詮義をいひつくべし。殊に曾根太郎は城中にあつて、
 家の變事をしらざれば、いさゝかも罪なしと兩人の所領をも曾根太郎
 にあづけ給ひぬ。瀬次郎助六はさらなり、專平關屋も活かへりたる心
 地なし、かくまであつき君の御惠骨に彫り肝に銘じて忘れ候らはじ、
 縦令劔のむしろに臥し、火惱の臺に上りてなりと撈出さでおくべきか
 と、四人ひとしく喜びけり。次日に至り義實公より初鹿速水之助とい
 ふ士をして、瀬次郎助六を國ざかひより追はらふべきよし命じ給ひ、
 はた寶劔を撈出すに置ては本領安堵たるべく、御墨付をくだし給ひし
 かば、かしこみて御請なし、何地をあてと定めもなく專平關屋もろと
 もに出行きぬ。曾根太郎意休も國ざかひまで送りきて、若し假栖もさ

だまらば、書簡をもてつげこすべしと、涙ながらに別れけり。

二 すだのかくれ家

下總國角田かはらに、關屋のさと、いふ所あり。專平と馴染めし關屋も彼處の生れなれば然よび、又妹もわたり近き川にゆかりて綾瀬と名づけける。元來この姉妹はいと貧しき農夫の女にて、父はいはけなき時身まかり、朽葉と呼ぶ老ひたる母のみにて關屋十五六才の頃までは家もありしが、母朽葉も昔はさるやごとなき御館に給仕して、假名文の一くだりも見覺えたる老女なれば、絲くり機織賤しき手業に月日を送らんは若きほどには本意ならずと、往年つてを求め氷上の家の侍女に送りける。關屋も年老ひたる母を打棄て、他國に移らんは心のそこらに喜びざれど、思ふことを翻さるる母の性に、力なく妹あや瀬もろと

も、安房國へ赴きしが、若氣の花のあだしごとより、主君たる瀬次郎助六さへ浪々の身となりゆくを、朽ばが歎きいふべくもなく、さればとていよ關屋を懲しめたりとも歸りやらぬあやまちなれば、專平を心よく婿となし、あたりの空舍を買求め、塵をはらつて瀬次郎助六が假栖となし、主従四人心ひとしく寶劍の詮義に心をくだき、しかる趣をば書簡をもて安房國へも告げしかば、曾根太郎もなかば心をやすんじ、一年はことごとくもなぐすぎぬれば、説話休否。さても前つ年意休は門平に寶劍を奪はせ、兄弟三人を罪におとし、おのれ氷上の家をつぐべくおもひしが、義實が仁心にて心あて齟齬、其後は何思ひけん、美麗婦人をあまねく探し求めしに、この頃鎌倉に早舟とよぶ舞女ありて、さき頃琉球より蛇皮二弦の樂器わたりしを、和泉國中小路といふ琵琶

法師一弦をそへて、三弦を製したるを彼の早舟もよくその妙手をきはめ、萬葉の長歌に節をくだしてうたひければ、月見る殿、花見る筵には、みな人競ひて彼を迎へける。意休仄かに早舟がことを聞出し、數百金に贖ひおき、曾根太郎に申しけるは、和主未だ妻なうして寢覺めさびしくおもふらめ、これ色を貪るにもあらず、子なきは不孝の一なり。心には入るまじなれど、苦しからずば側女にも見なし給へと、早舟を送りける。早舟も鎌倉にありつるときは、紅をまとひ紫をむすび笑を買ふ人のために粧ひしを、今この家にあがなひ得られて、武士たる者の側女となり、よろこびに斷えず心を用ひて給仕しければ、曾根太郎も二なき者におもひ、翼をならべ枝を連ぬるの契ふかく見えにけり。さても意休は如何なる姦計ありて、早舟を曾根太郎におくりしと

問ふに、彼はおほく人になれたる舞女なれば、媚をけんじ花情をよせ、好語をもて曾根太郎が心をとろかさ、さすれば白濱の勤仕も懈るは必定せり。その虚に乗じ曾根太郎もなきものになさんと、ふかくも思ひめぐらしけるが、さはなくていよく氷上の家の榮えゆくを心のうちには怒るといへど、曾て色にあらはさず、しばし曾根太郎が許を訪ひ、かの早舟が艶にやさしきのみならず、實をつくし仕ゆるを見、かゝるほどならば家こそ早舟を側女となさんものと、悔の八千たびくゆれども、今更彼を戻すべしといひもならず、おもひに胸を痛めける。かくてある時門平を使として、下總國關屋の里にいたらせ、瀬次郎を俄に招きければ、瀬次郎は何事やらんと心を痛め、助六に留守をあづけ、義實公の勘氣の身をはかり、しのびやかに笠ふかくかつぎ、

日あらずして意休が家に至りける。意休瀬次郎が來りしを大によるこ
 び、ひそかなる所に伴ひ、さて申しけるはわれ和主を招きしこと別義
 にあらず、和主助六此國をさりて後、いかなる天魔の見入れけん、曾
 根太郎が行状よろしからず、晝夜姪酒に耽りて、白濱の勤仕を怠り、
 剩へ此頃早舟とよぶ舞女を側女となせしが、彼又類ひまれなる姪婦
 にて、目にふるゝごとの男に懸想し、私夫をひき入るゝこと、みめよ
 きあしきを選ばず。されど曾根太郎はたゞ早舟を愛し心より、曾てこ
 れを知らず、たましく諫を入るゝ者あれども、馬耳風のたとへのごと
 く、無益事となりゆきて、今ははやわがいふことさへ用ひざれば、
 詮すべなう和主をまねきたりと、實しくいひければ、瀬次郎もあまり
 に思ひもふけざることなれば、頓に答もなさず、やゝありて仲父君い

かにしてか此憂をさくべしといひければ、意休聲をひくくなし、われ
 思ふことあり、和主今宵われと共に、曾根太郎が許にいたり酒に酔ひ
 したるありさまにて、早舟に艶書をおくるべし。さきにいふごとく
 なる姪婦なれば、返事をなさんは鏡に色のうつるがごとく、百に一も
 あやまつまじ。そのうち彼が返事を白地に曾根太郎に見せ、かゝる姪
 婦なれば疾く早舟をしりぞけ給へと、われもろとも諫言なさん、よし
 かへりごとなうして、曾根太郎に告げたりとも、諫言なさん方便にて
 しかはからひしことをわれ分明いひとかば、和主のいひわけは明かな
 り。『氷上家の浮沈こゝにありと、理ありげに云ひければ、瀬次郎は無
 才といふにもあらねど、只一すぢに篤實のみなる性なれば、いふが隨
 意むべなりとおもひ、意休が側にて艶書のおもむきをいひ出るにまか

せ、くさくさの事かきをはり、姊もおなじき人を慕ひまゐらするも、縁にこそあるらめ。今宵しづけく忍ばんに、露の情をかけてよと云へるを、筆のをはりに書加へ、意休と打つれ曾根太郎が家に至り、あまりにおとづれを聞候らはねば、ひそかに訪ひまひらするといひ、すぐよかなるをうれしみ、曾根太郎も斜ならずよろこび、まづ助六が無事を問ひ、こよひは旅の勞れもあらんに、明日こそつもる物語なさんと、余の事はいひ出でず、酒肴をもふけてなしける。瀬次郎は過刻に意休がいひたること心にかゝり、ろくろ酒も咽にくだらず、目をとゞめ坐敷の光景を見るに、果して在國の刻は見もなれぬ美麗女子、曾根太郎が側につきそひ居れば、これこそ彼姪婦ならんと心に推し、遠路に勞れしやらん、心地あしとその席を退出で、幸ひ關屋が妹あや瀬は

曾根太郎につかへ今もなほ此館にあれば、瀬次郎彼をよびよせ、姊關屋母朽葉の恙なきよしをつげ、それとなしに早舟がことをつばらに問ひければ綾瀬答へて宣ふごとく、兄君早ふねといふ女を側女となし給ひしが、彼人にかざり姪れたる心ありとは、見も聞とも候はず、殊さら憐みふかき性にて朝夕妾にさへ心をつけていたはり給へば姉上に別れまゐらせても、早ふねどのを姊とも主ともおもほひて、力ぐさになし侍べるといひけるに、瀬次郎少しく疑ひいでき、兎やせん角やせんとためらひしが、まづ意休が言葉にまかせ、此懸想文を送りてのち彼が心を引き見んと、聲を密め白地に云ひがたきいはれあれば、兄君の目にふれざるやう、此文を早舟とやらん女に送りくれよといひければ、綾瀬は心にうたがひながら、廊をつたひて早ふねの方にいたらん

となすを、意休人なきところにてよびとめ、今昏門のあなたに聞き
 ゐるに、そは瀬次郎より早ふねが元へおくる懸想文なり。若し早ふね
 うけひかずして、曾根太郎に語りなば、ゆゝしき大事をひき出すべし。
 そは我にあたへよ、事なくおさむる計ありと理をつくして云ひければ、
 綾瀬はいとさかしき性なれど、此年十四才にて漸く童だちなしたる未
 通女なれば、こは何となさんとたゆたひしが、意休が言葉を実にもと
 やおもひけん、かの文をそのまゝ意休にわたしける。少時ありて意休
 早ふねの方に至り、密にいひけるは御身未だ詳のことは知るまじなれ
 ど、今日來りたる瀬次郎といふ者は、兄曾根太郎には似もよらず。姪
 酒にふけりし悪性者にて、されば主人の勘氣を蒙り、今は下總國に住
 めり。彼先に酒席にありて、御身にふかく懸想せし面持なるが、果し

て是見給へ、流にしたがふ小舟のぬしへとしるせしは、早ふねといふ
 藏頭隱語にて、御身にこがるゝ懸想文とおぼし。われ物蔭にうかがひ
 居るともしらず、此文をあや瀬にいひつけ、御身の許へ送らんとなし
 けるを、われ又あや瀬をすかしとり、人しらず煙となさんとおもほひ
 しが、つくづくおもひめぐらすに、然はからは御身この文をうけお
 さまめ給ふとおもひ、却つて事をひき出さん。少時怒りを忍び給ひ、御
 身手づから此文を彼にかへし、おのづから羞らふごとく言聞かさば、
 彼も思ひの念をたゝんと打ちそみて云ひければ、早舟貌に紅葉をち
 らし、少時あきれて言葉さへ出さゞりしが、流石事なれたる女なれば、
 さることあらんと思ひけん、かの文を袂に入れ、瀬次郎がゐる一室
 の方へ歩みゆく、意休も後につきそひて、いかなることや言出ぬらん

と間をへだて、耳をかたづけ聞きわたる。早ふねしづかに瀬次郎が側
 に来り、數ならぬ妾にあつき心の仰せごとありしは、身にも餘りてう
 れしみ侍れど、我妻ならぬつましがさね、うさかの杖の數をまし、つ
 くまの鍋をかさねんこと、女たる者のつゝめる要なり、かく申さば戲
 れ事を實とせしと、さぞや笑ひ給はんが、口さがなきも女子のつねと
 聞きゆるし給へ。この玉章若し兄君の目にかゝり、ざれごとの實とな
 り、連枝のなかたえて、ぬれ衣を着給はゞ、妾もおなじ咎あるに似た
 り、はやぐ火に入れ焼きすて給へと、言葉短くいひなし退き出でぬ。
 瀬次郎彼玉章を取上げ、此姪婦我にかへり事なさるは、まだ彼が運
 の強きなりと、やぶり棄てんと封おし切れば、こはいかになかには女
 文字の返事あり、愕然として讀み見れば、もしほかにもれもやせんと、

言葉にはわざとすげなうもてなしまゐらせしが、露眞ある御心ならば、
 今宵四更の鐘を相圖にしのばせ給へ、曾根太郎の愚者に飽まで酒をも
 りつけぬれば、酔しれて他愛なし。それぐのはなれ坐敷に、聞をも
 ふけて侍ちまゐらせんと、よみては驚き、くり返しては怒りなす後の
 方より、いかに瀬次郎わがひしにたがはざる姪婦ならんと、聲かけ
 てあゆみ來るは、これ則ち意休なり。瀬次郎ありし次第を物語り、此
 返事の文ていにわれ實彼に心をかけしと思ひ、曾根太郎の愚者とする
 しあり、我にさへかくのごとし。況や他人と通せしおりは、強ち兄君
 をわらひ種になしけんことの面にくさよ、此恨いかにしてかはるけん
 と、怒氣しのびがたき面持なれば、意休膝をすゝめ、そはいと心やす
 し、汝今宵彼が聞へしのび込み、一刀にさし殺せよ、たとへ早舟死し

たりとも、此返事を證據となして、われも共々いひ説かば、曾根太郎の迷ひはるけんは必定せり。此計いかならんと言ひければ、瀬次郎此義むべなりとおもひ、まだ四更には程もあらんに、仲父君にもしばし休み給へと、兩人はおのれくが臥戸に入りその後は音もなくひそまりけり。これ意休にいかなる奸計ありや、そは次の件りを讀得てしらん。

三 因果之暗討

瀬次郎は夜の更行くをまち、先彼姪婦を殺害なし、そのうち意休もろとも、曾根太郎に諫言なさばやと、一筋に思ひ込み、菊の花壇の蔭にかくろひ、庭づたひにしのびゆけば、はや真夜半にて入るかたの月はやぶれたる鏡のごとく、影暗うして油つきたる燈火に似たり。をりし

も風さと吹きて、きりくくと柴折戸のめぐる音さへ、ほかに人や來るかた流石にうしろめたく、漸竹椽に這ひ上れば、人待つほどつて障子紙門も手につれて開き、何なく聞にしのび入れば、羞らふさまして短檠へ小袖うちおほひ、暗にあやなく壁をなで、柱をさぐり、やをれ屏風をひきあげ、振袖のはしを握りて探りより、己姪婦よくもわが兄の心をとらかせしよ、先に艶書をよせたるも、汝が心をひきみん爲ぞと、氷なす刀を逆手にぬき持ち、心頭をさしとほせば、あつと一聲魂ざりて、あへなく息は絶え果てたり。しすましたりと死骸の裳に刀をぬぐひ、外の方へ出でんとす。此とき意休は袖をもて手燭の火影をかくし、瀬次郎が側近く歩みより、こは曲者と雪洞をさしつくる火かげに見れば、早舟とおもひのほか、兄曾根太郎女の小袖を身にまとひ、鮮血に

まみれて死しむたり。意休いきう聲荒こゑあらげ、盜賊たうぞくの爲業しわざとおもひのほか、汝なんぢは瀬次郎せじらうにあらずや、そもいかなる恨うらみありて、兄あに曾根太郎せねたろうを殺害せつがいせし、あれとらへよと云いふ聲こゑにつれ、門平もんべいはじめあまたの侍さむらい、瀬次郎せじらうをくみとめんとひしめきける。瀬次郎せじらうは夢ゆめとも現うつともわきかねて、少時しばしあきて居ゐたりしが、何思なにおもひけん近ちかよる侍さむらいを三四人にんとつて投なのけ、辛からうじて外とのかたへ走り出いで、行衛ゆくゑもしれず逃失にぼうせけり。意休いきう莞爾くわんじとして、かれ何地いづちへ逃去たひきるとも、われ思おもふ仔細しさいあれば、遠とほく追おふことは止とどまるべしと、それごとくに又賞金またしやうきんをあたへ、臥戸ふしどに入りて休やすみけり。これ如何いかなることにて曾根太郎せねたろう早舟はやふねが閨ねやにありしといふに、はじめまづ意休いきう瀬次郎せじらうを賺あざむきて、はや舟ふねにおくる懸想文けさうぶんをか、せ、瀬次郎せじらう早舟はやふねが手跡しゆせきを見覺みおぼえべくもなければ、意休いきうかねて女筆にょひつをもて返事へんじを拵こしらへおき、あや

瀬せをすかして艶書えんしよを取りたるとき、こしらへおきし返事へんじをいれかへ、早舟はやふねに渡わたせしなり。はや舟ふねは實じつに瀬次郎せじらうが懸想文けさうぶんとおもひ、なかには返簡へんかんの偽にせものあることをしらず、先まきのごとく瀬次郎せじらうにかへしぬ。そのうち瀬次郎せじらうに早舟はやふねを殺害せつがいなすべしとす、め、彼かの瀬次郎せじらうが艶書えんしよをばひそかに曾根太郎せねたろうに見みせ、彼かれが怒いかりを引出ひきだし、こよひ忍しのぶべく文ぶんていあれば、人ひとしらず早はやふねが閨房ねやに入りかはりゐて、瀬次郎せじらうが忍しのび來きたるを捕とらへ異見いけんなせば、彼かれもおのづから耻はぢぢて早舟はやふねが事思ことおもひ立つべしといひしゆる、曾根太郎せねたろうもつゐに意休いきうが奸計かんけいにおちゐり、弟あとう瀬次郎せじらうが一刀たうに命いのちを落おしぬ。嗚呼あゝこれいかなる日ひぞや、時ときに文安三年丙寅ぶんあん ねんひのえとら、秋九月某日あき ぐわつ かのひなりけり。さても瀬次郎せじらうは思おもはず兄あに曾根太郎せねたろうを害がいせしこと、全く仲父ちゆうふ意休いきうが奸計かんけいならんを心こころづき、若もし門平等もんべいにとらへられなば、忽地たちまち意休いきう

が佞辨ねいべんにて罪つみにふくし、絞首しほりくびをはねられん、さすれば此この一事じ助六すけむつ專平せんぺいにもつぐることあたはず、恨うらみをはるけん時ときなかるべしと、漸やうやくその場ばを切抜きりぬけ、夜よに日に休いこはず下總國しもよのくにへ歸かへりけり。助六すけむつ專平せんぺいは、瀨次郎せじらうが房州ほうしゅうへ旅立たびたちしを、いかなる事ことならんと思おもひわづらふとき、瀨次郎せじらうがかへりしを大おほいによるこび、急いそぎ出迎いでむかへ坐敷ざしきにもなひ、何等なんらのことにて伯父おやぢ君きみより俄にはかに招まねぎ給たまひしかと問とひけれど、頭かしらをたれて一切つやく言葉ことばも出たさず、やゝありていひけるは、仲火なつか君きみ兄人あにびとにもいとすぐよかにましませば、氣遣きづかふ事ことなかれ、われは晝ひるほどより心地こころちあしと、一室ひとむに入りて打臥うちよしぬ。助六すけむつ瀨次郎せじらうが、物思ものおもはしき顔色かほいろを心こころに審いより、專平せんぺいが袖そでをひいて云いひけるは、兄人あにびとのありさま平生つねにかはり、その上刀うへかたなのさげ緒をに鮮血せんけつのつきたるは、房州ほうしゅうにて一方ひとかたならぬ大變たいへんありしは必定ひつちやうせり。さ

れどわれわれくくに悲かくつつみ給たまふも、これ又またふかき縁故いはれあらん、關屋せきやはさらなり、朽葉くちはは老女らうぢよのことなれば目覺安めざとかるべし。彼かれにも仔細しさいを語かたり聞きけ、ともく心こころをつくすべしとおしへける。瀨次郎せじらうは閨房ねやに入り一伍いちぶ一什しじよを書かきおきて、切腹せつぷくなさんず覺悟かくごなれど、はや助六すけむつ專平せんぺいその面おも持もちに心こころづき、紙門かみかどによりてうかひ居ゐるありさまなれば、若もし爲しそんぜばあしからん取と、筆硯ひつげんを潜ひそかにとり出いで、音おとなきやうに雨戸あまどをひらき、此處このところより三町ちやうあまり南みなみのかたに、林鐘寺りんしょうじといふ古寺あれたらありしかば、かの寺てらへしのびゆき、佛前ぶつぜんの燈籠とうろうを取來とりきたり、心こころしづかに書かきおきを書かきはり、切腹せつぷくなして死失しつうせけり。嗚呼あゝむかし、人ひとの言いへる事ことあり、佞人ねいじんの言葉ことば甘きこと蜜みつのごとく、人ひとを害そふこと利劍とぎつるぎにもまされりとは、意休いきうがごとき佞人ねいじんをさしてやいひけん、書しよをひらくの女兒むすめ、是これを見彼みかれにたくら

べて、悪をこらす一助ともし給ひね。あげまき物語せん編上の巻おはんぬ。

前編下の巻

四 あけがらす

さても専平助六等は、さらに瀬次郎が忍び出しをしらず、漸く夜半におよび關屋手きよめにいで、雨戸のあきかけしを審り、瀬次郎が臥戸を半面ば、臥具むなくその人はあらず、只助六等三人が父なる、東彌太が位牌を机上にのせて上座になほし、數珠一れん傍にあるのみなり。こはなみのことにあらずと大いにおどろき、助六専平をよび起し、如此くくのよし物語れば、二人は周章まどひ、をちこちを駈けめぐり、はやあかつきに及びけれど、的なき矢を放つがごとく、いつ尋ねあたるべうもおぼえず、夜あけてのち又異所を探し見んと、むなしく歸路

に赴くおり、偶林鐘寺の門前にて助六が旦夕手馴し硯はこの蓋を拾ひ取り、急ぎ堂守りの青道心をよびおこし、若しさる人は來らざるやと問ふに、道心寝はれたる聲して、宵より人はおろか犬だも門内へ入る者はなかりしが、當寺は見らるゝごとく空寺となり、われくゝごとき三四人の道心あるのみなれば、崩れたる垣の間より馬を入るゝも心やすし、先三昧堂のかたを索し見給ひね、まだ仄暗きに是持ち給へと、骨疎らなる提灯をさし出す。專平一禮して手に取り見れば、三界萬靈といふ文字しるしあり。若し瀬次郎君も此靈のうちに入り給は、いとせんと心にかゝれど、さらぬおもゝちして回祿なしたる本堂の礎をつたひ、卵塔の方へあゆみゆくに、孤兔の叢露こぼれ、石碑も右なるはたふれ、左なるは斜にかたぶき、荆棘薜蘿石佛の蓮坐にまといひ、

鳥の糞梢にしろく、蝙蝠ものさみしく鳴みめぐり、新木の念珠、雪柳寶蓋の穢くちぎれたるが、地上に満ち、なほゆくに鶏頭華の實をむすび、曼朱沙花咲き残りしうちに、人影あり、胸打さはぎ近つき見れば、これ瀬次郎が亡骸なり。助六あはていただきおこし、こは何としてよかるべき、われ甲夜よりものおもひある御顔色とは臆度せしが、かく御自害あらんとは神ならぬ身の夢しらず、とめまゐらせぬくやしさと、何等仔細やわきまへざれど、せめて一言さることありと告給は、又詮すべもあるべきにと、小兒ごとく泣さけぶ。專平も諸共に悲歎の涙に眼もあきえず、ともに死ぬべくおもひしが、やゝありて涙をおさめさるにても瀬次郎君筆すゝりを取て給へば、御書遺あるべしと、目をとめてこまやかに見るに、果して口にふくみしものこそあり、こ



れなんめりと助六にわたす、助六取上げよくも専平心づきしと讀みてはおどろき、繰返しては泣き、やよ専平國に残りし兄人にもはや此世にはわたまはじ、昨日までも今日までも、兄弟三人にありつるものを、一日二日のそのうちに、幸なくわれのみ活残り、何樂みに世を經べきと、瀬次郎が亡骸を振りうごかし、身もうくばかり泣きにけり。専平は狂氣のごとく、こは何と宣ふぞ、御兄曾根太郎君にも、非業の死を遂げ給ひしや、そは何人の爲業ぞや、とくくあとを讀み給へ、雲のうら海のそこ迄たづねめぐり、その仇人を索しだし、骨をひしぎ皮をさきても、恨をはらさんと敦圀あらく問ひつむる。助六は漸く涙をおさへ、又書置をよみくだし、少時あきれて言葉も出でず、いかなせん専平兄曾根太郎どの、仇人といふは、則ち切腹なされし此兄人なり

御書おきをよみ見れば、あやなき暗の人たがへにて、兄は弟の手にかゝり、弟は弟にいひわけなしと、自害して死亡給ふは、いかなる宿世の報ぞと、瀧なす涙腮をつたひ、おさゆる袖も朽ちるばかりに泣叫ぶ。専平も言葉なく、瀬次郎が死骸に取りすがり、昨日房州より戻り給ひしとき、平生ならぬ御けはひと、夫婦もろとも心をつけしに、其甲斐もなう、あさましき御有様といひつゝ、死骸打守るに、また口のうちに一書あり、取上げ見れば秘中の秘と記しあり、こは心得ずと助六に渡す、助六讀見て緑林の殺客遠く尋ぬるに及ばず、おそるべしといふに、専平其言葉を訝り、縁故を問へど助六答もなさず、瀬次郎が死がいをあたりへかくし、忽ち一塊の新墓をきづき、南無阿彌陀佛と念佛して、泣くく家路にかへり、助六専平にいひけるは、われ思

ふことあれば、汝これより房州へ旅立ち關屋が妹あや瀬をとく迎へ來よと聞えければ、專平ことこのよしはしらざれど、仰せかしこみ候と房州へこそおもむきにけり。關屋朽葉が歎きもおなじことのみにて、くだくしければしるさず、あらかじめ臆度給へ。これはさておき、伊吹久國、別號意休は心のまゝに奸計なりて、曾根太郎を瀬次郎に殺害させ、彼にも舌頭をもて咎をおほはせ、なきものにせんす思ひしに、瀬次郎漸くその計に心づき、辛うじてその場をきりぬけ逃去りしが、兄を殺せし大罪あれば、自害せんは必定せりと、わざと遠くは追はず、今ははかかることなしと早舟を枕に近づけ、さまざまに口説けども早舟さらに承引かず、さしも奸智ふかき意休すら情のみちは心にまかせず、又一夕閑寺門平等と酒宴をもふけ、計をかへ品を異にしてはや舟

を口説きければ、早ふね眼中に涙をふくみて云ひけるは、先殿曾根太郎君横死なし給ひてより、面に白粉をほどこさず、唇に紅を彩らず、髪はわらすべ一トすぢをもてつらね、魚だもなめぬ妻が身のつゝしみは、おそれあることなれど、先殿を良人とも思ひ侍ればなり。君は此身をあがなひ給ひし恩人なれど、さきに聞え候ごとき妾が心しておもへば、仲父君もひとしき御身をもて、かく道ならぬことを宣ふは竹葉が云はする根なしごとなるらめ。よし仲父君になきにもせよ、女の二夫にまみゆるを武士の身にたくらぶれば、敵の門に弓弦をやすめ、主に向つて矢を發つをもてひとしとすと、眉じりひきあげつゝやかに云ひのふれば、意休怒氣心頭よりおこり佩刀するりとぬきはなち、早舟が目さきへつきつけ、やよ女強わがことばをこばむとなら、汝が良

人曾根太郎がすまゐする、冥途黄泉といふ別館におくりやらん、いのちおしくば色あるいらへとくなせと、刀の背にて早ふねが腮をもたげ手もとまはれば忽ち無縁の幽客とへんじ、魂冷になるべきが、強きや凌兢や、殺すも活すも只一刀のうちにありと、さまざまにせめさいなめど、早舟はたい眼をとちて、わづかに唇のうごめくは、心のうちに彌陀の唱名なせばなるべし。意休大に氣をいらち、門平に命じて、早ふねを縁さきの柱に高手小手にしばらくあげ、活しもやらず、殺しもやらず苦痛をさせて腹えんと、中刀の小柄をぬきとり、右の腕につき立つれば、早ふね叫んで眼を見ひらき、のう情なや意きうぎみ、現在從子の妻たるわらはに、懸想せしさへ道ならぬに、かゝる苦患をうけさするは、鬼か悪魔かおそろしや、いまいふごとく黄泉とやらんに、曾

根太郎君もゐますとなら、はやく妾をころしてたべ、半坐をわけし蓮葉に、二人ねるのが樂ぞと、身をふるはして泣叫ぶ、意きう早舟をはたと睨み、さまでむつまじき曾根太郎に、極樂にて逢もせんと殺しもやらず苦痛さするが、これにても心に從がはじやと、又削刀を肩の尖りにつき立つれば、白膚も鮮血流て紅にへんじ、あゝと叫んでほとゝ命も絶えなんとす。意休微笑してあゝ心よや、これを酒菜に今一盃のむべしと、左に盃をさし出し、右に刀を取上げ一人ごちていふ、夫花は未だ開かざるに紅あり、酒は微醉に興ありと、あまりに酔ひしれては樂みうすし。此小杯にいま十杯のまばよきほどに酔ふべきが、いかに門平わが數とりのたはむれを見よと、一杯呑んで早舟が季指を切り落し、あゝと叫ぶを莞爾て打見やり、又一杯呑ほして無名指

を切落せば、二本のゆびよりながる、血は、紅のいとのごとく、苦しげにうめくさま、叫喚、大叫喚衆合、黒繩、等活の地獄の嘖はいざしらず、彼血盆の刑罪も今目のまへに見るごとし。かゝりける折侍女あや瀬は早ふねが苦しむ聲を聞きつけ、そこ、と尋ねめぐり、此光景を見るよりも、意休が手にすがりつき、こはそも如何なる答ありて、早舟さまを御折檻や、先づ妾に故縁を告げ給へと、二人が中に立隔たる、意休あや瀬が背うち撫で、さかしき女子よき處へ來りしぞ、わが姦計の種となりし汝、活けおきてはかた心にかゝれども、命ばかりは助けくれん。先これを持つべしと削刀を投出せば、綾瀬わびしかに削刀を手に取上げ、是をもて如何なる事をなし候なりと問ひければ、意休早ふねをゆびさし、われ過刻より削刀ばりをたてしかど、あまり

にしぶとき女めゆる、心倦みて手勞れたり、幸ひ汝われにかはり、彼に憂目見すべしと聞くに、あや瀬は肝きえて、そは何と宣ふぞ、日頃中よき早ふねさまに、削刀ばりをたてよとや、その事ばかりはゆるさせ給へと、削刀を打すて、その儘倒れ泣きにけり。意休あや瀬が目さきへ刀をつきつけ、これがこはくばはや早舟を苦しめよ、嘖めずば汝を切殺さんが、いかにくとあや瀬が細くびかい搦んで、早ふねが側につきやりぬ。綾瀬はせん方なくくに、削刀を手に取りて、ふりあげはふりあぐれど、主もひとしきその人に、いかでか疵のつけらるべきと、涙にむせんでふりかへれば、意休白刃を身近くつきつけ、今にも切るべきありさまなり。早ふね苦しき息をつき、あや瀬どの何たゆたふことはなし、はや削刀をわが身にたて、御身の難義を遁れてた

べ、なきものとおきらめし、わらはが命はおしからじ、此上の情には
 吭とやらんをかき切つて、苦痛させぬが慈悲なるぞ、これ手を合せて
 拜まんにも、繩目にかくまれ心にまかせず、はやく死にたや疾く殺し
 てくれよとて、さめんと泣きまどふ。あや瀬も涙に目もはれて、い
 かいはせんずおもひしが、わが小腕につきたて、早舟が身に鮮血を
 そゞぎ、こはく後を見かへれば、意きうといへる猛虎あり、前に毒
 蛇のそれならで、貫くごとによはりゆき、知死期をいそぐ削刀ばりは、
 月目の鼠にことならず。此とき意休門平は先よりの亂酒に酔ひしれ、
 足を十文字にふみちがへ、雷のごとき斬してたあひなく、睡りければ、
 綾瀬ひそかに喜び、先いませしめひきほどき、早舟にさゞやぎけるは、
 門平意休が酔伏したるこそ幸ひなれ、汝が事はんは無益、いざこの

處を忍び出んと、けやくしく小づまひきあげ、塀ごしの松によりて、お
 のれが肩をふませ、早ふねを塀にのせ、早舟が腰おびを上より下すを
 力とし、つゞいて塀に乗移る。はや舟はやくも外の方にとびくだれば、
 あや瀬も共におりんとせしが、裳風にひるがへりて、松の小枝にひき
 かゝり、脛あらはなるをおほはんとなし、松の梢をうごかせば宵にふ
 つたる村雨の、雫や葉すゑに残りけん、はらくと露ふりて、椽先に
 臥居たる門平が面にかゝり、偶目覺てあや瀬が塀を乗越ゆるを見つけ、
 大に驚きしやうどけし、帯をとつて引おろし、意休をゆりおこし、如
 此くこのよし告げければ、意休大に怒り、其奴早ふねがかはりとし、
 もとの柱へくゝるべしからき目見せてくれんずと、いきまきて罵るに、
 門平かゝとうちわらひ、家長の命に候へど、二人とも酔興の上なれば、

かく手ぬるき噴をなしとり、逃さんもはかりがたし、幸ほど近き岩戸川へなげ込み、溺死させて腹を給へと、憐むべし鷺の小鳥をつかむごとく、綾瀬を肩にひきかたげ、岩戸川にかけりゆき、ときの間立歸り、さても彼小女を水の森へなげ込みしが、浮きつ沈みつ流るゝさま、又心地よかりしなると告げけるころは、はや曉近かりけり。其のち意休は曾根太郎が横死のおもむき、瀬次郎が勘氣の身をはゝからず、當國へ足を入れしなると、己のみ理ありげに、義實公へ言上なし、佞辯をふるひて遂に氷上の所領をわがものとなしけるこそ不敵なり。さて専平は夜を日についで、意休が館におもむきけるが、はや綾瀬は非業の死をとげし次日なりければ、いかにとも詮術なく、殊に専平をとらへなば、兄殺しの瀬次郎が行方知るべしなど、それ彼いひのゝしる

を聞き出し、當國に長居せば、いかなる凶事出来べきもはかりがたしと、下總國へ立歸り、このよし助六はじめ女房關屋母朽葉にも物がたりければ、三人が歎きいふべくもなく、僧を請じてあや瀬がなきあと懇ろに弔ひこれよりも、助六は意休が奸計なることをはかりしり、時の至るをまちにけり。此下三年が間物がたりなし。

五 花山之光景

専平助六等は、せき屋の里にも住憂かりけん、武藏國花川戸といふ處に卜居し、女房關屋母朽葉もろともに都鳥を土にて作り童が手あそびに賣りて、これを活計となしにける。今に至りて彼地の土人つち細工をなす者あり、又此専平朝貌を好みて多く植ゑけるが年毎秋に至り、専平が住居の垣根を遠方より望むときは、恰も瑠璃のすだれをかけた

るごとし。されば時の人彼を異名して、朝貌專平とぞ云へりける。かくて日わたる駒の足をやすめず、三年は夢の間にぞすぎゆきぬ。專平一日清水村といふ處に諸用ありておもむき、偶助六が仲父意休當國武藏に來りしを聞出し、この由助六に告げければ助六斜ならず喜び、われとくに房州へおもむき、仲父の胸中さぐり見んとはおもひしが、なみならず姦智ある意休なれば、却つてかれが謀計の網にかゝるもしるべからずと、今日までは延引せり。彼當地に至る事これ天のたすけなり、畢竟寶劍の紛失も、意休が爲業とおもほへば、いかにもして彼に出會ひよそながら僉義せんと、次日より專平は髻を墨にてつくり、備奴のさまをなし、助六もいと風流にいでたち、宜竹が作の尺八を腰にさし、二つ印籠一つまへ、むらさきの鉢巻を鬢さきに結びさげ、大路

狭しと六法ふりてあゆみゆくに、彼はまた近曾前髪をはらひて、若年風流士なれば、往來の老若かへり見ざるはなかりけり。いまだ此頃は武藏野の草いやしげき昔なれば、宮戸の森より淺草寺の境内まで、千本の櫻あり、盛りの頃は遠近の遊客つどひ來り、宮戸川に舟よせては、さながら川の面に水なきがごとく、三股の月の夜も、これにはまさるべうも覺えず。助六專平をいざなひ、日毎かしこの花をみめぐり、今日も又つねのごとく丹前姿に出たち、暮近きまでたづねめぐれど、それとおもはん手が、りもなければ、とある茶亭にやすらひて、助六つくぐくおもふやう、われすぎし年は一時に二人の兄を亡ひ、仇人はそれとしりながら、仲父といふ名に討ちもならず、嗚呼いづれの日か寶劍の僉義爲いだし、家名を發す期あらんと、過ぎ越しかたをおもひ出

で、すゝるにあはれ催せば、川かせはげしく吹來り、花包ながら落花は、老少不定も目前にて、青葉となりゆく梢には、盛者必衰の理あり。花に飽なき春の日に、かへり路いそぐ入相は、會者定離とやひくらしと、かゝる詠もいたづらに、身の憂のみおもひ出るをりしも、夫にひきかへ爰に群來る女連あり。是は柳町とか云へる妓樓の妓女なれど、花見る一日はつねの婦女をまねび、一樣の塗笠着て、そこよ爰よと媚きありくその中に、わきて目立つは新左衛門がおぼろ染にむら鹿子の下着をかさね、輕多むすびの帶しどけなく、紫の鍾帽子のみいたゞきしは、艶を慢じてならん、是則ち三浦屋の總角といふ妓女なり。對の禿に幸阿彌まき繪の蓑盆をもたせ、深く酒に酔ひしれたりと見え、雛妓の肩に手をかけ、裙かいとつて彷徨さま、ほかの妓女にた

くらぶれば、鶴の鶏のなかに立てるがごとし。先に床机にやすらひ居たる妓女聲をひとしくなし、總角ぬし何地にて酒すごし給ひぬと問ひければ、總角うち笑み、何地にて酒のみしと改まりたる問ひごとにては、面にはぢをいただき侍る、にくからぬ花の盛り、一盃二盃の數かさね、いつしか色に出づれども、酒醉本性たがはずと、皆さまのあとしたひ、漸くこれまで來り侍ると、たよくと歩めるごとくに裳ひるがへつて欄麿をちらし、ゆるさせ給へと助六が休びるたる同じ床机に腰うちかけぬ。助六も先刻より彼が紅顔緑髪たるに精神まよひ、心肝くだけなん思ひなるに、まいて今身近く來りたるを見て、心ときめけど大事をかゝえしわが身をかへりみ、いろにや出んとさらぬ方のみ詠め居たり。雛妓ども何やらん總角にさゝやき、今日の花見は花のほか



なる花あつて、さぞ心うき給はんに、もの思はしき御けはひこそ心得
 ねなどいひけれど、一切咎もなさず、只烟管のすいくちに大指をつけ
 て額にあて、酒酔に胸苦しきおもゝちなれば、助六側の妓女をよび、
 見まゐらすればあのぬし深く酒に酔給ふとおぼし。われ幸ひ酔をさま
 せる薬をもてり、苦しからずはまゐらせんと、たが袖に梅の花を蒔繪
 したる印籠を渡しける。されば百年の後、ある醫師此薬法を得て、酔
 客の爲に製し、助六が印籠に因みて袖の梅と名づけゝるとなん、總角
 は彼薬を得て大に喜び、茶碗にうつし呑みをはり、よしなに謝して助
 六にかへし、はた女童に私語、さゝやかなる帛包を助六が袂のうちに
 入れさせけれど、助六はかつて是を知らず、専平は又かゝる處に助六
 を長居させなば、家猫をして松魚を守らするに似たりと、側より歸路

をすゝむ、助六も床机をたち、先づ稻荷に參詣なし、そのち歸りな
 んと、宮戸の森をさしてぞゆきぬ。あまたの妓女總角が側に來り、今
 日は口頃よりの戀人にあひ給ひ、さぞな嬉しくおぼすらん、なぜによ
 そながら言葉にてもかはし給はじや。傍にながめゐてもどかしう思ひ
 しといひければ、總角貌さと赤うなし、怒いだみたる言葉にて心のた
 けをいひ出なば、耻しらぬ女子とわらひ給はんと、さきぐりして人し
 らず玉章をまゐらせられたれば、色ある返簡あるやうに、いで御佛をたの
 みまゐらせん。暮れすぎなば老杉板のはら立てん、先賽をいそぐべ
 しと、足もとかるう立出でけり。はや寺の晩鐘告げわたりて花見の
 往來もとだへければ、茶亭の老婆は床机などかたよせけるをり、少
 時此處かし給へと、野郎笠を着たるまゝ、茶亭にやすらふ侍あり、こ

れ何等の者なれば則ち意休なり。白齒者閑寺門平に語りていへらく、
 汝われにおくれて當地に來れば、詳の事は知るまじけれど、近曾不斗
 三浦屋の妓樓に登り、總角といふ妓女を見るに先年心をかけし早ふね
 に露たがはず、もしくは彼女ならめやと訝りおもへど、十本の指不具
 ならざれば、實の早ふねにはあらず。その夜總角を酒縁によびむかへ
 情のことはかかせども、難面さは早舟にや似つらん、ひたとぞ心
 したがはず、任他わらひを賣る妓女なれば、金を多にまきちらさば、
 彼方よりしたひ寄らんと、夫より夜ごと三浦屋にかよひ、多分の金を
 失ひ、今は自ら囊中空し。幸ひわが佩したる兩腰は、先年汝が盜取り
 たる蛇形丸の寶劍なり。われ強ち此寶劍を望むにあらず、彼兄弟を罪
 すべき計なれば、わが許にあつて詮なし、何卒此寶劍を人しらず賣代

なし、金を得る計束はあるまじきやと、潜に物語ふをり、側よりその
 寶劍われにゆづり給へといふ者あり。意休外に人なきとのみ思ひかゝ
 る密事をかたりしが、側に人あるを見て大におどろき、その人を熟見
 るに、身に襤褸をまとひ賤しげなる酒賣る翁なり。門平からくと打
 わらひ、汝知らずや蛇形丸といふは、往昔三條の小鍛冶がうつたる所
 の縁故ある寶劍なり。見事買得る金ありやと、ほこりがに罵るを、彼
 翁耳にもふれず、懷中より百兩の金取りいで、意休に對ひ、小子その
 寶劍を少しく用うる處あれば、二腰のうちいづれにもせよ、一刀賣り
 わたし給へといふに、意休ひそかに喜び、中刀のみ身にとめ、一刀
 を翁にわたしぬ。門平意休に私語、若し彼翁專平等が親類ならば、ゆ
 々しき大事をひき出すべしととめしを、意休うち笑ひ、その折は又

計策もあるべしと、茶亭の床机を立出でければ、翁もうれしげに荷をかたげ、白酒召せくと呼び行きけり。此翁は當國芝崎村に住む十兵衛といふ白酒賣なり。彼が心に善ありや、悪ありや、そは後編に詳なり。これはさておき助六專平兩人は、宮戸の森の稻荷にまふで、先刻に休らひたる茶亭のまへを過りしが、忽ち兩人の武士が憩ひわたるを見出で、目をとめてうかがふに、一人は目關笠に面はわきがたけれど、一人はまさしく閑寺門平に似たり。竊かによるこび兩人の武士が立出たるうしろにまわり、今休みわたる武士は、何地の人にやと茶やの老婆に問ひければ、老婆いらへてわれは近曾耳うとくなつて、詳の事は聞えざれど、今日關笠着たる武士は、過刻に君たちと同じくわが茶屋に憩みたる三浦やの總角が色香にまよひ、夜毎に通ふよしを今

一人の武士に語りたるのみ聞えたりといひければ、助六莞爾と打笑み、いかに專平 幸なることこそあり。いと稻荷を拜せしとき、不斗わが袂をいらへければ、小やかなる帛包あり、訝りつゝ聞き見るに、さきの總角とやらん妓女が、わが許へおくりたる懸想文なり。大望のさまたげと、破り棄てんとおもひしが、暗に手がりの一つとなれり。われは是より三浦やに至らん間、汝は一先わが家にかへり、一伍一什を朽葉關屋にかたりてのち、後より追つき來るべしと、專平に立別れ、松原通りを南へといそぐに、程なく花街に至りければ、竹格子に金屏風をもてよそほひたる妓樓、所せきまで立つき、その中にはたして三浦やといふ女肆あり。これならんと樓上に登り總角をよびむかへければ、總角は助六を見るよりも、胸といろくまでうれしみおもへど、

さらぬ面持にて座敷に出て、酒宴に時をぞうつしける。はや三更のころほひに、ねよとの鐘を告げわたり、座敷の人は漸々にすべり出で、側に人なければ、あげまき助六が身ぢかく來り、過刻には難波津のひろひ書なるたまづさをまゐらせ、殊に思ひをのべんとすれば、同じ言葉のかさなりて、さぞな讀みうく覺しつらん。今宵不意あひまゐらするは、圓通菩薩のひきあはせ給ふならめと、互みにあだしことならぬ思ひをかたりいで、總角かさねて助六にとひけるは、君そのごとく紫の鬘帽を結び給へば、往來の人ひとりとして君を知らざる者なし。そは如何なるいはれありやといふに、助六聲をひきくなし、此鬘帽を不審たまは、詳に語りまゐらせん。又此一事につきたのみたき仔細あり、われ先年房州のやしきにて、主君よりあづかり奉る、蛇形丸と

いふ寶劍を失ひし刻、すでに絞り首にもなるべき覺悟なりしが、おもひきやその罪をゆるし給ひ、剩へ劍のせんぎ爲出さば、本領安堵たるべしといふ御墨付を、義實公よりくだしおかれしゆゑ、君恩のかたじけなきを、少時が程もわすれじと、則ち彼の御墨付を濃紫の手筆につみ、此ごとく鬘帽となせしは、君恩を頭にいたゞく心也と物がたれば、總角打ひそみてその寶劍の事につき、君の仲父君意休といへる人をたづね給ふならめといふに、助六打おどろき、尤仲父意休汝が許に通へるよしは聞きしかど、己が口より己が悪事を語り出づべき筈もなし、是にも又ふかき緣故あらんと問ひければ、總角打笑み、いよいよ君は萬谷助六主にてわたらせらるれば、別にあはせまゐらする者あり。しかして後意休も今宵此樓にあれば、しかゞ計ふべしと手を取

つて彼處の座敷に伴ひける。是すなはち如何なる人にあはせ、如何なる計策をおこなふや、硯水つきて片刻説話休舌。此年はこれ嘉吉二年、春二月某日なりけり。

六 はるの夜

此夜意休も三浦やの樓にありて、只管總角が心にしたがはざるを怒り、これ見よとて金を多にまきちらせば、藤戸幫間が詐謙喘呪のかしましきも、漸く夜閑りて雨さへ蕭々と降り出ければ、春にも似ざる風の音、梢をならして物寥し。あやしむべし燈火颯と消ゆるとひとしく、白小袖まとひたる女、しほくと意休が枕方にあゆみより、怖しや無常の風もまたずして、露と消るたる仇野の、あだし此身をたれとやおもふ、われは汝が毒手におちいり、悪魚の餌となりはてたる、靈魂ふ

た、びあらはれし、あら腹だ、しや汝も泉下の鬼となさんと、怨念かげ身につきそひけれど、寶劍の威徳におそれ、ちかよることともま、ならずと、丈なる髪を手にからみ、すつくと立つたる面を見れば、先年門平に命け、岩戸川へ沈めにかけて侍女綾瀬なり。意休愕然と打驚き、尺八袋に仕込みたる短刀をぬきはなち、切掛らんとなしけるを、綾瀬身を閃かしておどり出で、む、と笑ひをしのび、助六總角が待ちわたる座敷にいたりける。これ實の怨鬼にあらず、あやせは縁故ありて、此三浦やに賣渡され、今は白玉といふ妓女なり、助六あや瀬に對ひ、過刻には心急くま、仔細を聞きはたさず、御身は房州にて非命の死を遂げたとのみ思ひわたるが、そもいかなる縁故ありて當處の妓となり、又意休が寶劍を盗みたる虚實をさぐり見んとは云ひつるぞと問ひ

ぬ。あや瀬はふり落つる涙をおさへ、君たち下總國へ至り給ひてのち、聞きおよびもし給ひつらん、御兄曾根太郎君、早舟どのといふ側女をかへ給ひ、それよりなみならぬ騒動出来、兄君不慮の横死ありてのち、仲父君意休さま、かの早舟どのにふかく懸想、さまざまに口説けども、承引かざるを憤り、なさけなや高手小手にしばらくあげ、指二本まで切落し、ほとく危く見えけるが、おりよく意休門平兩人酒に酔ひて、ねむれる間をうかひ早舟どの、いましめ解きほどき、見越の松より落しやり、妾もあとより逃げ去らんとする處を門平に見とがめられ、意休君の怒つよく、只一刀に切り殺さんずありさまなれば、所詮のがる道なしと、妾も既に覺期をきはめ、念佛しつ、門平が意休君にいふを聞けば、君今綾瀬を手にかけて給ひ、佩刀を穢すも無益な

り。われ岩戸川へ連ゆき、しづめにかけて申さんと、妾を肩にひきかたげ、飛ぶがごとく彼川に至り、水中には沈めもやらず、何思ひけん橋の欄干にしばらくおき、何地へか至り、曉頃に立歸り、わらはをば國戸に賣りわたしぬ。思ふに意休君には妾を水底にしづめたりといひ、己の金を得んと然はからひしに疑ひなしと思ひきはめ、されば白小袖を身にまとひ、髪をさばきて幽霊のすがたに似せ、意休さまの閨中をさしのぞき、寶劔の威徳にて近よる事もかなはじと、問事せしかば果して尺八袋のうちより短刀をぬき出して切りつけしは、これまさしく彼蛇形丸の寶劔ならんといひけるに、助六打おどろき我はじめ御身は早なき人とおもひ居たるに、まいて母朽葉あね關屋はさらなり、御身が非命の死を遂げたるよし、専平房州にて聞きたるを忌日として、只

管菩提を弔ひしが、當所にあること語りなば、よも實とはなすまじと、
 歡びにたへざりけり。あや瀬重ねていひけるは、さきに申殘せしこと
 あり、妾圍戸の手にわたり、國々を誘引ありかれ、憂艱難を爲はべり
 しが、不斗當所に来り、此總角主を見るに、君は御出國のあとなれば
 知らせ給ふまじけれど、兄君の側女なりし、早舟さま、似たりとは物
 かは、直にその人の在すがごとし。おなじ妓女とならんには早舟さま
 に仕ゆる心して、此主の側につきそひたきわらはが心なりと、圍戸に
 ことわけのべ、若し此家に賣渡さずば、舌をかみて命をたゝんといひ
 たるゆるゑ、此家の妓女にうりわたしぬ。總角主にも、頼りなきわらは
 が身の上を語りまゐらせ、今は姉妹の因をむすび、白玉と名もよびか
 へ侍る。日外意休君に、此家の門首にてはしなくあひまゐらせしが、

わらは貌をそむけて過ぎぬれば、形姿のかはりしゆるゑ、あへて目も止
 め給はず、これ幸と今宵幽霊に出でたち、意休君の心中をさぐり侍り
 しなりと、をちもなく語りければ、總角又助六にむかひ、白玉ぬしの
 故郷、關屋の里とやらんへは、あまりに路も遠からぬよし聞きたる故
 人をしてたづねまゐらせしに、はや彼地には住み給はざるよし、妾も
 共に力なうおもへども、詮術なく月日をおくり、そのうち不斗君を見
 そめ、便を求めて御名を問へば、助六君といひ給ふよし、さては日頃
 白たまぬしの物がたりありし御方ならんと心をつくし、尋ねまゐらせ
 しかひありて、不意あひ參らするも、深き縁ならんといふに、助六又
 云へりけるは、意休先年心をかけし早ふねに似たる御身なれば、彼
 女のことを思ひ出で、この樓にかよふとおぼし。兎に角御身等二人が

計らひにて、寶のゆく衛もあらかじめ知りたれば、急ぎ我家に立歸り、
專平にも一伍一什を物がたり、寶をわが手に取もどす計策を定むべし
と、まだ夜ふかきにわかれけり。

蒼る花はさく花にまさりて紅あり。さきに著す總角物語は半に筆を止めぬれば、
おくに色濃き花やあるらめと、其後を見まく思ふもありてや、東延堂の主人予が
草蘆に音信て、後編をもとむ。不日にして書果つれど、こは雲と見まがふたくみ
もなく、雪と降りそふ景色もなし。只見る人の止惡修善の志をおこすを宗とす。
夫意休がごとき佞人の一度幸福の至るを譬ば落葉が中の狂花は、詠るに目がれせ
ぬ物にはあなれど、夜の間の霜に枯れ萎むも速なり。白玉がごとき形容すぐれて
身の幸なきは、谷ふかき花の見る人もなく、遂に樵夫の斧にくだかれ、薪となる
にや比せん、助六專平が故郷に歸り、再び花さく春にあふこそ、爛熳たる梢より
もめでたし。

于時文化五戊辰年花川戸の花見る月墨水を硯にた、へ橋の名にゆかる

柳亭種彦誌







後編上の巻

一 川添之款冬

かくて助六は夜深きに柳町をたち出で、花川戸へと道を急ぎ、鳥越村
 みたらし川まで来りしが、春風狂雲をはらひ、月光水上に閃きけれ
 ば、傘より掌をさし出し、雨の小止をこゝろみ川端に立留り、暫時四
 方をかえりみるに、かまが淵のあたりにや、白魚とりの篝火ともしつ
 れ、松原通にひなびたるうたの聞ゆるは、里がよへる馬かひなり。彼
 漁舟の火のかげは、寒くして浪をゆき、驛路のすゝの聲は、夜山を過
 ぐるといふ詩さへ思ひ出でられ、時しりがほの蛙の聲に、川添の款冬
 も咲き亂れけんとおもひはかり、朧月にすかし見つ、扇をもつて佩刀

の柄を拍子とり、山影門に入つておせども出でずと、中音に朗詠し、
 ゆき過ぎんとすに、怪しげなる男大路へ横さまに臥居たり。酒酔に
 やとまたぎこえんとなせば、彼男叫んといひて起あがり、やよ武人眼
 はなきや、汝下駄をもてわが脇腹をしたゝかにふみつけたれば、あら
 痛やたへがたや、やをれそのまゝに歸すべきや、皆のものおきよく
 とよばれば、小笹のあはひ山吹のかげなんどより、數多の野臥非人
 あらはれ出で、助六を中に取込み、非人といへど人は人なり、汝みだ
 りに土足にかけ、言葉もかけず行過ぎんとする無法者、そこ一寸も動
 すまじと口々に罵りけり。助六莞爾と打笑みて、歩行べきための大路
 に倒れ、土足にかけしと罵るは、必定盜賊ものどりならん、手にか
 んはやすけれども、大望をかゝえし身は、大事のまへの小事なり、汝等

が命をば汝等にあづけをくと、懷中より五兩六兩の小判取り出で、大地へなげて行きすぐれば、件の非人又行先に立塞がり、合力の金とあらば、非人の役に受おさめんが、盜賊物取と言ひしこそ奇怪なり、此奴物な云はせぞ打殺せと、棒ふりあげて打てかゝる。助六閃りと身をかはし、盜賊と思ひのほか、汝等は人にたのまれ、意趣あるものを待伏せなすと覺えたり。月かげにて面を見よ、意趣遺恨うくる覺えなし、花川戸の助六とも、又近曾まで前髪ありしを異名によび、總角の助六ともいふ若ものなりと、袴のくゝり高やかにとりあげ、よる共よせじと身構へたり。一人の野臥呵々とうち笑ひ、紫の鬘帽を結びしは、花川戸の助六と言はずとするき出たちなり、其助六こそわれくゝが望む相手なりと、棒閃かして打つてかゝる。助六傘にて丁度うけとめ、一

人の野臥足を目がけて打はらへば、はづみをうつて棒踏おとし、首筋おさへて三間計投退けたり。又こりづまにむさぶりつく、助六怒氣心頭より發り、猿臂をのばして帯搔掴み、目より高くさしあげて、山吹の中に打込めば、花色衣身におびて、物をもいはず死してけり。をりしも月の雲がくれ、春雨一しきり降出でぬれば、かくて二人の非人あやなき暗をうかひより、左右より無手とくむ、助六後に身をひけば、兩人徒に空をいただき、互ひに脊をうち合せ、振かいてゑいやと組みつく、月は雲の絶間にあらはれ、冴けき影によく見れば、同子うちに互ひに助六ならざるに驚き、落ちたる棒をおつとりあげ、無二無三に打つてかゝる。助六手早やく刀抜きもち、頭上に閃して追ゆけば花のほつりを飛ぶ小蝶の、雲霧にあふごとくにて、みなちりくゝに逃げ

にけり。助六強て追はんとなさず、心徐かに刀をおさめ、袴の塵うちはらひ、自若として彷徨おり、手布にて面をつゝみし大男、後の方よりうかひより、物をも云はず助六に切つてかゝる。助六はやくも身をさけて鏢もとをしかとおさへ、手布かなぐり面を見れば、是則ち門平なり。さてこそと身を轉し、刀の柄に手をかくれば、又月は雲に隠れ、もとの暗とぞなりにける。門平かなはじとや思ひけん、三四間後にさがり、大地へはたと壁錢蜘蛛のごとくうつ伏に倒れ、生死も更に知れざれば、助六何思ひけん落ちたる傘とりあげて、月光地に敷いて拂へども生ずと朗詠し、下駄をもて門平が脊をふみこえて、花川戸へぞ歸りける。門平漸く起あがりけるをり、向より來りし竹駕のすだれをかゝげ、門平首尾はいかにと問ふ。是則ち意休なり。門平答につまり

しが、やゝありていひけるは、われ先に助六が柳巷にあるを聞出し、君より金を申しうけ、此處の非人にあたへ助六をまちぶせなし、何の苦もなく助六をうち殺し、死骸はみたらし川へしづめ候ふ、其こぎみよき光景、家長に見せ申さぬこそ残りおほし。渾身の泥にまみれしをもつて勇ましき働なしたるは思しはかり給へと、實しく賺きければ、意休ほくそゑみいしくも計ひたり、その賞品くれんすと、刀をぬきて切つてかゝる、門平大に驚き、家長何等咎ありてわれを害し給ふやと、後のかたへ身をさけて、忙はしく問ひければ、意休呵とうち笑ひ、汝侍女綾瀬を岩戸川へ沈めしといひしゆゑ、われ是を實となし、過刻に彼が幽霊をいとあやしと思ひしに、彼は三浦屋の白玉といふ妓女にて、實の綾瀬にうたがひなし。さすれば汝われをたばかり、妓女に賣

りしは必定せり、助六さへ打殺し、心にかゝる雲もなければ、活け置きて用なき門平、觀念せよと又切りつくる、門平は何といひとく言葉もなく、意休が小石につまづきしすきをうかひ、いづこともなく逃失せけり。是はさてをき助六は家にかへり、朽葉關屋專平に、綾瀬は命恙なく、三浦屋にて三玉といふ妓女となりし事より、彼が計にて意休が尺八袋に仕込みたる、寶劍を見あらはせしまで、おちもなく語りければ、三人が喜びいふべくもなく、朽葉關屋はちかきに三浦屋にいたり、綾瀬にあひてつもの物がたりもなしてんと、その事のまいひ出で、其夜は臥戸に入りても眠りつかざりけり。さて助六は次日より風のこゝちと打臥し、一日二日は枕をももたげざりしが、醫師の計しるしありて、いく日もあらず心地清くしくなりにけり。

二 あまやどり

爰に又、下總國千葉郡、大和田といふ所に、桑門の庵あり。前に小笹の垣をめぐらし、片折戸蔦蘿ひまなくまとひ、後は谷河清くして、心の塵をながす、常住讀經の聲たえまなく、香煙窓をいでては、見るにさへ心細く、鈴聲霧にこもりては、聞くにすらもの淋し。庵主は空信といふ尼なりしが、軒端近く大なる加條樹あるをもつて、村童椋の木の尼と異名せり。彼尼一日近村を勸化なし、暮ちかく庵へ立歸るをりしも、茅が軒端に音もせで、春雨しめやかに降出でければ、なほ心を清し、御佛にうちむかひ、一心不亂に念佛し、鉦をならして居たりける。こゝに又武藏國芝崎村なる、白酒賣十兵衛は、當國佐倉邊の親類の許に、のがれざることありて訪ひ、なすべきことはて、故郷へ立か

へらんと、此庵の前を過るをりしも、春雨一しきり降出でければ、晴るにほどもあるまじと、彼棕の木のもとに立よりて、小止をまつに往來の人も漸くにあつまり、旅虛無僧、猿曳、傀儡師、祝部などみな樹下に雨をさけ、種々の物がたりなしければ、宇治大納言の古事もおもひ出られ、葺くゆらせ聞き居たり。彼傀儡師のいへるは、われは近きころまで、武藏國花川戸といふ所に住居つるが、彼處に助六といふ遊俠あり、紫の鬘帽をむすび、天日朗なる日も、木履をはきて六方をふり歩き、往來の人に喧嘩をしかけ、猥に人の佩刀を抜取りて銚を見、又ある時は大路せばしと仁王立に立はだかり、わが股をくいるべし、さなくば此道を通すまじと罵り、畢竟狂人の所爲なれど、ことを好まぬ族は、韓信が辱をうくるもおほしと物がたる。彼祝のいふ

は、われも石濱の神明に寓居のをり、花川戸の助六が風説は旦夕聞候が、彼助六は何とかいふ名劍詮義のため、喧嘩にことよせ諸人の刀をぬき見るなりと語るに、十兵衛は果せるかなと笑を含みて聞居たる。側より猿曳のおかしげなる男里人にむかひ、さても此棕の木のもとなる庵室は、何者の住居にやと問ひければ、里人答へて、此庵は空信といふ二十計りの美麗なる女僧なり。いまだ盛の花なるに、いかなるあらしや黒髪をはらひけんと、見る人惜まずといふ事なしと語るに、彼猿曳投首していへらく、嗚呼心のまゝならざるをもて、浮世と爲とは誰がいつの世にいひ出でけん、世を捨てたる身は美麗も何かせん。あはれ人間も煙管のごとくならんには、彼尼の首をもて、わが家婦の首とすげかへまく思ふなりとうち恨めば、こはおかしき男なりと、旅虛

無僧のいへるは、世に入婿といふことなきにあらす、和主あれなる里人をたのみ、此庵の入婿になり給ふはいかにといへば、猿曳はたと手をうち、妙計と賞しいや待てしばし、わが心油元結に錢は入らねど、尼の女房も異物なり。夫ともに還俗なし、わが女房になるべきや、さあならば媒介なし給へ。其處謝には、馬小家に張御札、錢とらずにまゐらせんといふに、里人むと笑ひをしのび、此庵の尼は佛道堅固にして、夫むかへんなんど、は思ひもよらず、かねて當所に一字の御堂を建立せんと發願し、遠近を勸化なし、はや百兩あまり金もあつまりしと聞侍る、木魚鉦鼓を拍子として、猿の舞も似氣なかるべしと、皆くわらひどよめきぬ。雨はいよく降しきり、所詮晴るべき雲ゆきともおぼえねば、薙一枚を頭にかぶりて駈出づるもあり。又それくの所

にて傘からんと走るもありて、皆東西に別れさる。彼猿曳は、何やらんもの思ひある面持して、手を又き頭をたれ、半町ばかり立出しが、棕の枝にて猿の叫ぶを聞つけ、大いに驚き走りか歸り活計器を忘れたりと、猿を梢よりひきおろし、飛ぶがごとくに駈出で、残りしものは一個の旅士に、白酒賣十兵衛のみなり。彼士十兵衛にむかひ、御老人には何地の御方か知らねど、一樹のかげの雨やどりも、みなそれぐに別れたり。今足下と某二人なり、われらは房州の者に候へば、近きほとりには知方もなく、今宵一夜此庵にやどりを乞ひ申さんと思ひ候が、御老人にはいかか思すやと問ひければ、十兵衛も大いに歡び夫こそわれも望む處にて候と、片折戸ほとくと音なひ、しかぐのよし言入るれば、尼は心よくうけがひ、近きわたりには御知方も候はずとな

ら、白地なる屋なれど、今宵は是にてあかさせ給へ、濡れたる雨衣はこなたの衣架にかけをきね、足そゞぎ給は湯をとりてまゐらせん。と實しくもてなせば、二人は暗夜に燈火を得たる思ひして、少時勞を休めけり。説話兩頭、さても閑寺門平は、鳥越村にて助六を討そんじ、其場を辛うじて逃失せ、是も當國佐倉邊に、些の知方あれば、彼所をたのみて此わたりを過りしが、向ひより通りちがひし猿曳、門平を見てこやくと呼止む。門平其人を見れば、往年綾瀬を賣渡せし、鴉藏といふ圃戸なり。彼者は近曾側臥を病みてより多辯なれども言舌分らず、常に涎をながし物の用に立たざれば、門平只あるべきほどに疎遠を述べ、別れさらんとするを鴉藏少時とおしとめ、とある辻堂に門平を誘て言出でけるは、われ過刻に雨やどりなせしをり、不意金の

有處を聞置きたり。よつて今宵足下とわれとしのび込み、盜取らんとおもふなり。われ金の有處を聞出したる功あれば、彼金を三ツにわけ足下に其一ツをまゐらせ、われ其二ツをとらん、若百兩あるときは足下に三十三兩二十目をあたふべし若し二百兩あるときは、六十六兩四十目をあたふべし。若し三百兩あるときは、一百兩あたふべし。若し四百兩あるときは四百兩あるときはといひつゝ、鼻昏袋より懐中十露盤とり出せば、門平呵くと打笑ひ、先配分のことは盜得てもおそかるまじ。その盜むべき金はいづくにありやと問へど、鴉藏頭をうちふり、よき中らいも悪しうなるは皆金より起るなりと、脊なる猿の叫ぶもかまはず、又十露盤をとりあぐる、門平はもてあまし、さまで惜き金なら、和ぬしのみ行きて盜み給へと、立んとするを鴉藏周章押止め、足

下は氣短き男なり、さらば語り申さん聞き給へ。此あなたに大なる棕の木あり、その樹下の庵室に空信といふ尼、一字の御堂を建立せんと、あまたの金を集めしより、女の一人住なれば、おそるゝにはあらね共、われ生れ得てあしき病あり、盗みすることは大なる好物なれども、まづ夜みちを一人歩きえず、一度白刃を見るときは、足なへて立ちがたぐ、二度鮮血を見るときは、渾身しびれて動きがたし、是皆癩癩のわざにして、臆病なるにはあらず。われ金の有處を聞出したる功あれば、足下先庵室へ忍び込み、彼尼をくゝしあげ、庵中別に人なくんば、足下木魚をならされよ、われ夫を暗號とし、金の有所をさがすべし。若し又庵中別に人あらば、われ聞出したる功あるをもつて、足下より先へ逃出すべし。日頃きらへる夜道なれど、命を的に走らんといふに、

門平うちわらひ、そはおかしき説話なり、此辻堂にて夜の更行くもまたれまじ、向ひの酒房に行きなんといへば、鴉藏門平が袖をひかへ、われ聞出したる功あれば、酒代は足下出さるべし。まだ雨も止まざるにその笠もわれらにかし給へ、われは聞出したる功あり、必ず三つが一つを忘れ給ふな、彼尼を搦め給ふとき、よくくゝ手足の痛まざるやう心づけ給へ、われ彼庵へ入婿となるべき氷人を頼み置きたり。さすれば彼はわが女房なりと、喃々と呟やくは、狂人のごとくにぞありける。さても十兵衛旅の武士は、尼が庵にやどり、漸心おち居て種々の物が出たりなす間に、尼は火爐に薪折くべ、手づから茶を煎て兩人にさし出し、世塵を避けたる庵なれば、参らすべきものもなし。せめてもの風情に、二日早く來り給はゞ、庭の一木の若櫻さかりにて侍りしが、夫さ

へ夜の間の嵐にちり、砂に塗れてうるさければ、塵塚へはき入れぬ。是も彼且に紅顔あつて、世路にはこるといへども、夕に白骨となつて郊原に朽ちぬとかいふにや比せん、あのごとく大なる棕の木あるをもつて、妾を棕の木の尼と異名せるには、榎の僧正がむかしも思ひ出侍ると、何心なく云ひ出づる言葉のうちにも、深く身を恨みたるおもむきをこめぬれば、何さま由縁ある女僧ならめと、兩人心に思ひ居たり。かくて閑談時をうつし、尼は納戸とおぼしき所に、あやしの衾をもふけ兩人を臥さしめ、小やかなる机とり出で、御燈かゝげて讀經なすに、はや更けわたる小夜あらし、野寺の鐘をさそひきて、軒守犬の吠ゆる聲遠かたに物淋しく、松風板戸のすきをくゞり、燈火しばくはたゞき、いつのほどにか雨晴れ雲散りしとおぼしく、朧にさしくる

月かげは、窓の障子に墨竹を畫き、竈灶のあたりに鳴く歌女は、聲かすかにして牧笛に似たり。時に林中の宿鳥、俄に羽たゞきなして飛びさりければ、まだ夜ふかきに心得ずと、和ら障子をひきあけ見るに、雲突くばかりの大男、椽の板戸をこち放ち、つと入つて尼が弱腰はたと蹴倒し、聲たてさせじと手拭はませ、椽の柱にからめけり。是別人にあらず、閑寺門平なり。門平彼尼を熟見れば、美麗なる顔色、總角に彷彿たり。門平偶こゝろづき、尼の手をいらへ見るに、右の季指と無名指なかりしかば、さては早舟なりけるかとなみならず驚き、尼も又おそるゝ盗人の面を見るに、閑寺門平なりければ、一度ならず二度三度、彼が毒手に苦しむは、いかなる宿世の報ひぞと、泣聲さへも溼津で、おさへんとする袖もなく、千すぢの涙はふりおち、齒をくひ

しばり身をふるはし、心の中に罵り居たり。門平心しづかに佛前の鉦鼓をとり、外面へ暗號に打ならせば、鴉藏はうかひ居て、人なき知らせは木魚とこそいひつるに、鉦うちならすは若し外に人やあると、おそる／＼のびこみ、互に耳へ口をよせ、そここゝと窺ひまはり、手匣のうちより引捌昏に包みたる、露銀を取出し、まづ四五兩はこゝにありと開き見れば、こはいかに菩提樹の實なり。鴉藏腹立しくやありけん、間の紙門に打ちつければ、兩人が熟寝したる、顔のあたりへはらく／＼とふりかゝり、夜半の雪丸の板屁、もりくるにやと十兵衛偶目を覺せば、二人の盜賊こみ入りて、彼尼を高手小手に絞りあげ、何やらんさがしもとむる光景なり。老人なれども十兵衛は、物にこらへぬ天性なれば、杖にしこみし刀ぬきもち、門平に切つてかゝる、門平

おどろき飛びしさり、經机をもつてうけ止むれば、机眞二ツに切われ、抽斗に入れをきたる、小判四方にうち散りけり。門平すかさず中刀抜きもち、二合三合うちあひしが、老人なれども十兵衛は、略劍法を熟練なしたる男なれば、此奴殺すも無益なりと、右の片手にあしらひながら、尼が繩目をひきほどく、尼は喜び立上り、手にあたるを幸と鐵火ばち取りあげて、落ちたる小判を拾ひ居たる、鴉藏目がけ打ちつければ、的はづれず鐵火ばちを頭にかぶり、逃げんとなせど眼も見えやらず、よろめき立ッたるさまは、彼仁和寺の僧が足鼎かぶりしもかくやありけん、門平は十兵衛に切りたてられ、かなはじとや思ひけん、よろめきまはる鴉藏を刀の下につきつければ、十兵衛いかつて打つ刀鐵火鉢にがつしとあたり、火ばち中より切りわれて、瓜をさくよ

り心やすく、鳩藏二ツと成にけり。門平は其間に、雨戸蹴やぶり逃
 づれば、宵にやどりし旅の士、ひそかに納戸をしのび出で、外の方に
 うかひ居て、門平を絞りあげ、老人心をしづめ給へ、盜賊はわが搦
 め候と、竹椽にひきすゆれば、尼は腹たゞしき面持して、おのれ門平
 往年は意休と共にわれを苦しめ、咎なき綾瀬も、岩戸川へしづめしと
 やらん傳へ聞く、惡に惡報あることは、今こそ思ひしるらめと、はた
 と睨みければ旅の士いと不審、尼君には此賊門平が名を知り給ひ、又
 意休に苦しめられしなどと聞ゆるは、伊吹、氷上、兩家のうちにゆか
 りある御方にて候ふやと問ふに、尼は顔さと赤うなし、耻しながら妾
 は氷上曾根太郎が側女、早舟と申すものなりと答へければ、彼士大
 におどろき、さては兼て風説に聞きつる曾根太郎どの、側女、早舟主

にてありけるか。われも里見家に由縁ある者なれど、しのびやかなる
 旅なれば、姓名はあかしがたし、異日参りて見來せん、此門平は尋問
 ふべき仔細あり、われらにあづけ給ひねと、門平をひきたて、曉近
 く別れけり。十兵衛は黙として居たりしが、尼に向ひていひけるは、
 さては庵主には、氷上の家にゆかりある御方に候らひしや、われ由縁
 ありて、氷上兄弟が里見家よりあづかりし、蛇形丸の寶劔をつたへも
 ち、竹杖に仕込みて常に身をはなたず、過刻に鐵器を二ツに切りわり
 しも、彼寶劔なればなり。不意雨やどりの雑談にて、助六が假栖も聞
 き置きたれば、彼所に持ちゆき金に代んと立たんとするを、尼十兵衛が
 袖をひかへ、いかにも萬谷助六主、その寶劔詮義のため、深く心を痛
 め給ふよしは、妾も雨やどりの男が物がたりを、垣越に聞き候、彼所

に持行き給ふとも、久々浪人の御身なれば、金の調達心もとなし、願はくは妾に賣りわたし給へ、妾いまだ房州へ到らざるさきに、出國なし給ひぬれば、助六主とは知故ならねど、武藏國へ尋ねゆき、其寶劍をわたし申さば、草葉の蔭の曾根太郎君も、さぞ喜び給ふならんと聞ゆれば、十兵衛うちうなづき、二百兩の金あたへ給は、尼君の望みに任せ、寶劍をわたし申すべしといふに、尼は落散る小判取上げ、今爰に百兩にあまる金あり、三五日のうちには急度二百兩の金參らせんが、疑ふにはあらねども、妾は女のことなれば、寶劍の眞偽をしらじといふに、十兵衛彼刀を抜はなち、軒の下へさし出せば、潦にかしがましく鳴きたる蛙、忽然として聲を止め、もとの鞘におさむれば、又蛙の鳴きたること初めのごとし。爰に於て尼が疑も一時にはれ、十兵

衛は側の硯引よせ、隠家を仔細にしるし、尼にわたせば尼は受取り、武藏國芝崎村、白酒賣十兵衛と讀見て懐中におさめ、多日ならずして二百兩の金をあつめ、必ず音信まゐらせんと、鴉藏が死骸を十兵衛もろとも取かたづけ、早夜もあけはなれければ、十兵衛はわかれを告げ武藏國へぞ歸りける。

三 助六之前渡

歡び錦帳に生じて春海のごとし、夢陽臺に入つて夜年に似たり。と賦したるごとく、よろこび有りなげきあり、歡び微にして憂ひ更に多し。唯苦界をはなれまく思ひて、紅顔のうつらふ事をしらず、双親のためには身は花街の妓女となり、孝あるに似つれど、少年を賺し、他の不孝をまねぐは如何にせん。世に遊女ほどはかなくも罪おそろしきものは

あらし。さても總角は助六を戀ぞめて、彼人ならで心のした紐うち解くべくも思はず、病にかこちて客をさへ迎へざりしが、過日不斗も暫し物語らひてより、積日念の一時にはれ、心も長閑き春日の、くる、おそしと花やかに粧ひ、今宵や來ますと雛妓禿あまた引連れ、髪は手からみ結びの鷗髻、今様に束ね、鹿子目結の紫と紅と染めわけたる小袖を着なし、錦の袿には唐絲にて總角をむすびさげ、三ッ齒なる馬下駄を八文字にふみならし、三浦屋が軒近き床机にやすらひ、水口吉久や張りけん、長やかなる煙管に花山煙草を燻らし、人まち顔の麗はしきは、玉に比べんには香あり、花にたとへんには語あり。見る人ごと、心とめらるべき打粧なり。程なく日も暮れぬれば、章臺娼樓には、銀燭清々として白日をあざむき、栖あらず群鳥、風に吹るゝか

たちしたる漂客等、己こそ閑雅なりと、云はぬばかりに扇して垣間見つ、妓女の顔姿をあしざまにいひ、何某がもとにかよへば彼所の妓女われを恨み、彼方を訪へば此方にてかこつなんど、聲高にもものがたり、夫が言葉には似氣なく、すごとくと立歸るもあれば金はななく花主もがなと、みちのくも厭はず空たのめして歩行くもあり。鮎めせく、按摩痲痺もみさげんと、呼ばふ聲もかしましく、東西に走り、南北に行違ふ其中に、わけて目立つは總角が、ゆかりの色の紫髪帽むすんで、傘に雨と人目をしのぎつ、月なき夜は烏羽玉の、黒羽二重に鮫鞘は、云はねどしるき助六が、丹前姿に身をやつし、彼方彼方を見まはして、ものいひたげに見えければ、總角は夫と見るより喜び思ひ禿を走らせ、別に客人もおはさねば、はや此方へ來り給へ、海やまとつ

もる御物語もおはすなりと、言遣りけるに助六も、三浦や近く來り、
 總角が側に尻うちかけぬ。少時ありて往來の人も小絶えければ總角に
 向ひて言ひけるは、過日は思ひかけず、御身と白玉がはからひにて、
 寶劍の盜賊は仲父意休なりとおぼるげには知りたれども、是ぞといへ
 る證據なければ、明白に詮議仕出す計策もがなと、千々に心をくだく
 うち、思はずも病に臥し、一日三秋のおもひなれど、今日までは延引
 せり。將侍女綾瀬、今の名は白玉此世に存命ありとのこと、彼が母朽
 葉、姊關屋にも聞えつれば、死したる者の蘇生しごとく、よも實とは
 思はれじとの喜び、頓に來りて白玉にも對面なし、御身にも心をつけ
 ていたはりし、禮も述べくなんどいひつるをり、我病に臥しぬれば、
 束の間も枕邊を去りやらず、させる病にもあらざるに、御身等二人は

まづ色巻に赴くべしとす、めつれど、彼が事は打捨ておかれ、はや全
 快なり給は、寶劍の詮議こそ肝要なれと、いつもかはらぬ朽葉關屋
 が赤心に力なく、いまだ白玉に對面もとげさせず、是非に明日の夜は
 關屋をも連來らん。夫よりはさしあたりたる此身の難義、寶劍の盜賊
 もあはれ、他人ならんには手をおろして詮議なすは安けれども、仲父
 といふ名に力なく、われはいかにともすべなし、苦海の身に苦をかく
 るは、心なき事ながら、何卒御身がはからひにて、彼寶劍を外ながら、
 われに一ト目見せつる計策はあるまじや。主の勘氣をさへ蒙むりたる
 助六が、丹前姿の華やかなる打粧して、又も花巻に前わたりなしたる
 も、此一事を御身に頼まんだめなるぞと、いと信だちて物語れば、總
 角微笑していふは、すぎつる夜も聞え侍るごとく、夜毎にかはる浪ま

くら、數なく通ふ客人には、唯興をそへおもむきありげに物語らふのみ。心の操はやぶり侍らず、漫に思ひこがれしより、良人とも定めつる君の難義なし給ふ、其寶劍の詮議をば、わらはは望みても做得んこそ、女子の道なれ。かく聞え侍れば、賤しき身をも顧ざる無禮なる女なりと、心のうちには笑ひもし給はんが、君が一夜の情には、妾が百年の命をもなにかせん。もし意休君の怒りを惹出し、妾が骸兩段とならばなれ、妾は此々計ふべしと、助口が耳に口を近づけ、私語ければ助六大に喜び、尙も密にうち語らふをりしも、新造禿聲を等しくなし、向ふより意休君の來ますなりと言ふ聲におどろき、助六を袿の裾に忍ばせ、空知らぬ風情なして居たりけり。さても髭の意休は、近曾門平が御洗川にて、助六をうち殺したりといひしを實とおもひ、今はうしろ

やすく誰憚る事もなしと、又こりづまに通へども、總角は難面のみもてなし、一夜もうち解けてかたはらず、其心強さに、意休が懸念は彌増しにまして、今宵も暮るをまちて花巷に來り、何某が茶亭に總角を招ぎぬれど、病なるよしをいひて行きもやらず、白玉をして迎ひければ、意休は本意なげに白玉とうち連れ、三浦屋に入來り、總角が側なる床机に腰うちかけ、過刻に御身を彼所の茶屋に請ひしに、病なるよし聞えしはいかなる勞なるやと、ねもごろに問ひぬれば、總角は意休が方に背おしむけ、ふつに答だになされば、雛妓禿はいとうたてきことにおもひ、總角ぬし意休君の來給ひしに、などさらぬ方のみながめ居給ひ物語りもなし給はじやと、異口同音くして言ければ、總角腹立しき顔色して、あなさはがし、妾意休君の訪ひ給ひしを知らぬには



あらねども、雨の小止し雲間の星を、一ツ二ツとかぞふるがおかしさに、答もしばし做まらせじ、よくこそ今宵も來給ひしと、なげの言葉にいひはなし、又さらぬ方をうちまもり、煙草くゆらせ居たりける。意休もつぎ穂なれば、總角が側ちかくなほも居より、人には己が好むところをもつて樂とし、樂き業も好まざれば樂しからず、樂しからざる業も好めば樂しとはいへど、數限なき大空の星を算へ、夫がおかしと思ふ御身のものすき、小子ふつに應點ゆかずと問ひければ、總角大空を指さし、あれ見給へ星の林のいやしげきも、遊女の客人を迎ふるがごとし、文字こそかはれ彗星も客星も、あの星のうちにありと、博識の言給ひし其うちには定めて心にそまぬ客星もありぬべし。いく夜に辛くもてなして、辱をあたへてかへせども、又こりづまに通ひ

くる撃てどさがらぬ煩惱の牽牛、その七夕の今日やあふ、明日や逢ふと無益柳巷にかよひても、空に銀河といふ河あり、妾に銀帶といふ帶あり、下紐の天の川を斯うしつかりと結びては、あひ見る事はおろか、側に居るさへも荆棘を抱くこゝちなしぬ。硯の海も鳴門の海も、海といへる文字に二つなく、慕ふ男も嫌ふ男も、男といふに別なけれど、深き淺きもあるならひ、いつ咲く事もしらぬはつ花、いろなき山路に迷はんより、外に縁の艶はしき柳生ふてふ里もあるべし。あれ今飛びし星の名の、よばひわたりて詮なきこと、ゆふづく星の夕のごと、又異所へかよひ給へ、百夜はおろか千夜までも、君のごときむくつけき男には、肌ふれんことおもひもよらじ。と言はなてば、意休は怒心頭よりおこり、板金剛をもて總角が袴の裾をふまへ、中刀なかばぬきか

くれば、助六は床机の下にかくろひ居て、焼刃鐵色に心をつくるに、
 はたして蛇形丸にまぎれなし。扱こそとおもはず意休と顔見あはすれ
 ば、意休愕然とうちおどろき、手ばやく中刀鞘におさめ、象は兎の徑
 にあそばす、何ほどの辱あたふるとも、たかゞ傾城遊女のたはむれ、
 害せんとなしつるは我があやまりなり。人おほき人の中にも人ぞなき
 人人となれ人人となせ、斯く僅なることに怒りしはわれも人にあらざ
 りしよ。其中にも人にあらざるは過刻にわれにたとへし流星、その星
 は別にあり、他の金をいだし己が花とながむる遊女を、袖袂の蔭にか
 くらひ、色をおもてにあらはし、うちにはわれを討つべき計、水月猿
 猴のたとへ、猫を鼠のねらふがごとしと、側にありつる三つあしの香
 爐臺を取り出で、たとへていは、此香爐臺の三つ足は、曾根太郎瀬次

郎助六と、兄弟三人そろふがごとし、三つの足の力をもつて、よく百
 斤の鼎ものすれど、今はかくといひさま、刀をぬきて二つの足を切お
 とし、曾根太郎瀬次郎ははや此世を去りつれば、あとに一つの足あり
 とも、何の用にか立つべき。豫め汝が推量のごとく、二人の兄に自滅
 をとらせたるも、斯くいふ意休が計策なり、無念と思は、立出て、我
 を討てと飽までに嘲弄なせば、側にありあふ雛妓禿、其由縁はしら
 ざれども、如何なる變事やおこるらんと、手に汗を握りつめ、總角が
 顔をうちまもり居けるが、かくては舌戰の、いつ果つべきとも思は
 れじと、さまざまに意休を和め、總角ぬしには酒をすぐし給へば、さ
 まで心にもなきことまで宣ふが平生なるに、醒めて後由縁を問ひ給へ
 と、雛妓禿意休とうちつれ樓上にのぼりけり。助六は人なきをうかい

ひ、床机の下より立出て、再度御身の計策にて、寶劍の實否を見とゞけたれども、事あらたゝさず取戻す計ひもと、かくまでわれを罵りしも、よそに聞きなし忍び居たるが、兄弟が落度をつぐなはんとせば、仲父の姦惡を街にもらす。嗚呼我ほど薄命なる者はなしと、數回歎息なすに、總角わざと打笑ひ、君のごとく實ある御心には、さ、おぼすも理なれども、又よき計もあるべし。まづ酒一つ飲みてつもるうさをはらひ給へと、女童に私語、助六をば閑なる一室に忍ばせけり。さて總角白玉を近く招き、密にうち語らふは、御身不幸にして妓女となり、苦海のうちに姉妹のむすびせしも、深きえにしならめ、妾御身にたのみたき大事あり、何にまれ承引給はんやと言ひければ、白玉うち笑ひ、こはあらたまりし仰せにこそ侍れ、今は姉上とおもふのみにもあらず、

妾が主君たる助六君の縁ある御方なれば、心のうちには主とも親ともおもひ侍るに、たとへ命におよぶ大事たりとも、など否み候べきといひければ、總角大に喜び、頼みたき事別の仔細にあらず、御身今宵此花巷を亡命なして給はれといふに、白玉はあまりにおもひがけぬ事にしあれば、答へもなさず總角が顔うちまもるに、總角かけねて、さ、おどろくもむべなり、其由縁といふは、助六君のごとき直諒なる御心には、いかに惡逆なればとて、仲父といふ名に手ざしならずと、事のべてなし給へど、若し彼寶劍人手にわたらば、後悔して詮なし。妾今宵意休を賺し、心にしたがふさまにもてなし、酒をすごさせ、彼寶劍を盗み出さん、御身妾にかはり、寶劍を持ちて花巷をぬけ出で、花川戸にたづねゆき、關屋どのとやらんにわたすべし。一度は道ならぬ



計はからひを助すけ六君むむぎみの怒いかり給たまふとも、寶劍ほうけんさへ取とりもどせば、再度ふたたび世よに出いで給たまふよし、されば御心みこころとけて後のち、妾わらはも夫それを功こうとし、助六君すけむむぎみと二世にせまでもと、おもふはわが身みの欲よくに似につれど、君きみにそむくも君きみの爲ためなり、御身おんみはいかにおぼすやといひければ、白玉しらたまも喜びおもひ、妾寶劍わらはほうけんをもちて、花巷くろわを出いでんはかたき事ことにしあらねども、若もし姉上あねうへの難義なんぎとやなり候まうらはんと、いふ言葉ことばをうち消けし、あとは波風なみかぜなきやうに妾計わらははからふ旨むねあれば、今夜こよひ八やつの時計とけいを暗號あみづに、妾わらはが坐敷ざしきにしのおべしと、總角あけまきは樓むかいにのぼり意休いきうが座敷ざしきに至いたり、過刻こまきには酒さすぐせしゆる御心みこころにさはる事ことも申まをせしよし、醒さめてのちは面おもてに汗あせなす事ことのみ多おほしなど、いつになき親したしきことをのべ、聞きえければ、意休いきうは甲夜よひよりの酒宴さかまりに生しやうを隔へたてしごときうへなれば、こは我が佛ほとけの來迎らいがうに、かたじけなきことを聞きくものかな、

待まてば甘露かんろふるてふ日もありけるなど、うつゝ心こころにひきうけく飲のむほどに、總角あけまき多おほく言ことを云いはざるさきに泥どろのごとく酔よひ、前後ぜんごもしらす打臥うちよしけり。總角あけまきは心こころに喜び、用ようあらば手てをならさんと人ひとを遠とほざけ、意休いきうの枕邊まくらべを搔かさぐるに、果はたして錦にしきの袋ふくろに入れつる一品ひとしなあり、これならんと盗ぬすみ取り、わななく膝ひざをふみしめて、手てばやく桂行燈うちぎあんどうへおほひ、暗やみはあやなし探さぐり出いづれば、折をりしも八やつの時計とけいの車くるま、めぐる因果いんぐわと白玉しらたまが、待まてばや夜よさへ長廊下ながらうか、常つねなれたる座敷ざしきをも、しのおといふ心こころより、たゞみにつまづき、紙門しすまにあたり、おもはずも白玉しらたまは袖そですりあひ、互たがひにおどろき姉あねうへか、白玉しらたまかと、問とふのもあたりへ漏もれんをおそれ、息いきをつめて次つぎの間まにしのおび出いで、神佛かみほとけのめぐみにて、首尾しゆびよく盗ぬすみ取りたりと、寶劍ほうけんを手てにわたす。白玉しらたまは押おしいたいき、障子しやうじうちあ

けうち見やるに、往來しげき田甫路も、はや真夜中には人も小絶しとおぼしく、提燈の火影も見えざれば、裾はげしくはせおりて小屋根に下り立ち、漸く高塚に上りうつり、腰帶をうちかけて、閃りと外面に飛下りる。總角はすかし見て、大に喜び、心づきたる上草履、白玉めがけ投やるをりしも、女童が聲して、總角主くとよばふに、空知らぬ面もちして、あなかしまし、酒の酔をさまさんと、風にふかれ居つるに、何事ありやと障子はたと引たつれば、はつ時鳥一聲雲間に鳴きたりける。斯て白玉は難なく花巷はしのび出でけれど、暗夜といひ殊に道の程もしらざれば、如何せんとたゆたふおり、花巷がよひの戻り駕籠に行きあひ、如渡得船のおもひして、彼駕籠にうちのり、花川戸へ急ぎゆきけりとなん。

○此助六が前渡の條と、下卷のはじめ、あさがほのつゆの條とは同夜の話說なり。此條は柳町の廓街上より、三浦屋が樓に至り、夜半に至りて物語果つる、次の修は花川戸朝貌專平が閑居、前夜より次の日に至るの物語なり。夫よく心得て見給ひね。

後編卷之下

四 あさがほの露

是はさて置き、下總國大和田に住みつる早舟尼は、不日にして二百兩の金をと、のへ、白酒賣十兵衛が家におもむき、彼地形丸の寶劔を買得て後、助六が住所をたづね、手わたしもせまほしく、武藏國に赴かんと、角田川の渡に至り、少時遠近を眺望れば長堤の楊柳春寺をかくして、唯一聲の鐘を聞く、落日沈々として日も暮なんとす。はや舟に乘れといふなる渡し守は、わが名をよぶにやと、心よりおどろかれて、芝崎村のみちを問ふに、尙一里あまりありと答へければ、早舟熟思ふは、今宵道を急ぎて彼所へゆきたりとも、若し空しく索ね得ざると

きは便なかるべし。寧此邊に宿し、明けなば心しづかに尋ねんと、とある草庵へ立ちより、一夜の宿りを乞ひければ、主人心よくゆるしけり。是則ち別の家にあらず、専平助六等が閑居なり。此夜助六は花巷に前渡して家にあらず、關屋朽葉は早舟尼を坐敷にもなひ、何方より來り給ひしなど、煙茶のもてなし細やかにて、いと信やかに見えければ、早舟は斜ならず喜び、さまざまの物がたりなしけれど、早舟、曾根太郎が側女となりたるは、専平關屋出國の後にて、互ひに名を聞き居るのみ、いまだ相識ならねば、悲しい哉凡俗のあさましさは、唯よそごとのみ語り居て、寶劔を買得んと當國に至りしことは言も出さず夜は既に更闌けたり。いざ臥戸に入り給へとすゝめければ、尼は實にもとて、小やかなる服紗包を關屋にあづけ、廁に行きける。關屋何

心なく彼服紗包をいらへ見るに、中には二百兩あまりの金あり。此尼君いかにしてか、多なる金もちけるやと思へど、問ふべきことにもあらず、今宵はじめてあひぬるわれくに、多なる金を少時なりとあづけ給ひしはわれくが、心正しきことあらはれし故なるべし。人は心淨ければ、人もうたがひをおこさず、されば神佛のめぐみも深かるべしと心に思ひを一人ごち、程なく尼は廁より立出でければ、服紗包をかへし、今頃は助六君寶劔を取かえし給ひしかと、心の底に思ひつゝ、專平とともに打臥しけり。斯くて早舟尼は曉頃におき出でつゝ、關屋に向つて言ひけるは、妾は當國芝崎村とやらんにゆきつる者なるが、此所よりは道の程もさまで遠からぬよし聞きつれど、ふつに案内しらぬ初旅なれば、竹橋やとひ給はれと言ひけるに、關屋は心やすき

事に侍ると答へ、近邊に人をはせて竹橋をよびよせ、早舟尼にあたへければ、尼大に喜び、關屋朽葉に昨夜よりの心づかひを厚く禮謝し、歸路には又立より申さんとて、まだ仄暗きにわかれ去りぬ。説話兩頭、さても白玉は花川戸へとみちを急がせ、はや宮戸川なる松原通へ來りけるに、春の夜の明けやすく、既に東方生白、鳥啞々と啼いて、明星横雲に閃めきければ、輿舁白玉に向ひ夜もはや明けなんとなすに、少時これなる茶亭に憩ひたしといひて、竹橋をば床机の前におろし、汗など拭ひけるが、白玉は人目を憚りて、かごの内にて茶を飲みつゝ、すだれの間よりさし半面ば、側にも又一つの竹橋をおろし、かごかき二人休み居たり。彼竹橋のうちにも人ありとおぼしく、茶屋の小女茶など運べるさまなり。先に休ひ居たる輿舁も同子なれば、此方の輿舁



と相識とおぼしく、したしく物語りなし、何地に行くやと問ふに、柳町より花川戸へ行くよし答へぬ。彼方の輿舁かさねていふは、われは花川戸より芝崎村へゆくなれば、家公に願ひ、互ひに家公を取かへて乗せ申さば、われは花川戸へ歸るが順なり。和主も芝崎村よりは住居も近かるべし、されば互ひに得ありて損なき理ならずや、竹橋の代は如此となりと、彼が同子に用ふる隠語をもつて、密話點頭あひ、白玉が竹橋のまへに來り、聞き給ふごとくあれなる竹橋は、花川戸より來りしにて、彼所へかへるが順なり、乗かへて給はれば、われくが大なる仕合なりと言ければ、白玉は兎も角も其方等の心に任すべしと、すだれかゝげて立出づる、彼方の竹橋にもおなじさまに聞え、かごより出づる其人を見るに、年いと若き尼にて、何とやらん見覚えある面

貌なれど、髪はいと短く切りはらひ、墨染の姿なれば、早船なりとは思ひもかけず、早舟も白玉が顔つくくうちまもり、侍女綾瀬に其儘なれど、彼はわれと共に氷上の館を逃れんとなし、誤つて門平に捕へられ、害されしと聞きつれば、再び此世にあらん理なし、嗚呼心の迷ひならめと、會釋して互ひに竹橋に乗移り、只管あとを顧みて、南と北に別れけり。却つて説く専平が家には、彼尼かへりてのち、老母朽葉は浅草寺へ朝まふでに出行き、關屋は箒を取つて板椽の塵かき拂ひ、一人ごちていふ、夜はほのくくとあけつるに、助六君のかへり給はざるは、若し御身にあやまちもやありやせん、今朝はとりわき鳥なきの耳にさはりて心地あしとつぶやくを、専平うしろに立聞きて、主君彼寶劔僉義のため、花巷にかよひ給ふをりから、われも御供せんと申せし

かど、却つて人に目立ちてあし、汝は家に残るべしと、たゞ一人にて現在の意休といへる仇人あるを知りつゝ、通ひ給ふ勇氣、何御身に怪我あるべきいはれなし。鳥も口あれば啼くべし、御身のごとく心になかけそと言諭す折、見馴れざる老人門邊にイみ、朝貌專平ぬしとは此家なりやと問ふ。專平立出で、いかにも專平とは我なるが、老人には何地より來り給ふやといへば、彼老人いふ某は當國芝崎村に住む、白酒あきなふ十兵衛といふ者なるが、些賣りたき一品ありて、態々訪ひ申せしなりと、徐々と打通り、是見給へと竹杖を手にわたす、專平不審ながら取あぐれば、うちに仕込みし劍あり、抜放ちて熟見るに、先年房州にて失ひ、たづね索むる蛇形丸の寶劍に紛れなし。あまりに思ひかけぬことなれば、頓に言葉も出さず、少時ありて、老人には此劍

いかなる縁故ありて、所持なし給ふと問ふに、十兵衛答へて、先頃千本の櫻盛の折から、不斗其寶劍を買置き、此頃密に聞けば、此家の主此劍を懇望のよし、町人に似氣なく刀を所持なさんより、賣代なして利を得んと思ふなり。適悦は、買ふて給はる心はなきや、今にもあれ二百兩の金あたへ給は、賣わたしまゐらせんと、ものありげにいひけるに、專平點頭世にまれなる劍なれば、此方も望む所にはあれど、二百兩といふ多なる金、今といふては調達しがたし、三五日まちて給はれといへど、老人頭をうちふり、此寶劍是非に買ひえんとて、わが方へ尋ね來る契約なしたる、異所に二百兩の花主あり。いづれにもあれ金の早き方にまゐらせん、今日八ツの鐘うつまでは、奥もりたる一室にて一睡なし、道の勞れをやすめんうちに金整へ給へ、さなき時は

彼方へ賣渡さんに、其期我を恨み給ひそと、言葉をとぢめ紙門おし開け入りければ、専平は唯手を又き、鬱々として只管おもひわづらふさまなるに、關屋傍に近く居より、御身先にわらはを諫め給ひし言葉には似氣なく、今又物思はしき氣色に見え給ふは、心得侍らね。女のさしすぐしたる事にはあれど、諺にも三人あつまれば文珠菩薩の智恵ありとやらん、御身花巻におもむき、助六君に首尾を聞えあげ、其後事を議し給へといひければ、専平宜なりと承引、彼老人を取逃さるやう心をそへよと私語て、柳町へと急ぎ行きぬ。關屋は後を見送りて、少時涙にくれけるが、やゝありて顔をあげ、いふて歸らぬ周諄ながら、此身の不義いたづらより事おこり、御兄弟の御流浪、剩へ瀬次郎君は自害して果て給ふ、仇人といふも主君の仲父君、せめて寶劍僉義仕い

だし、助六君を世に出しまわらせんと、夫婦のものが憂艱難、焼物師とはなりくだれど、心は昔にかはら寵、けふりも細く漸くに、其日を營みくらすのみ。寶の在所はしれながら、二百兩といふ金の才覺、しばしの苦をやすめんと、今のやうに言つれども、三人四人集りたりとも、調達せんこと思ひもよらず、此身の顔が艶はしく、年も若うであるならば、遊女傀儡に身を賣りても、半は金も整へんが、さかりもすぎし木槿華、ながむるものもあらじとも、落て後なき妹の綾瀬、ゆく衛も夫と知れしかど、是とてもはや花街にあれば、かゝるたすけに得ならず、いかなる宿世の因果ぞと、數行の涙とゞめかね、身もうくばかり歎きしが、嗚呼泣きたりとして金を得べき思案もなし、又男の心はひろらかなればよき計策もあるべきぞ、母の歸りに間もあるまじ、茶

をわかして待まらせんと、投首して立あがり遙向ひを見わたせば、先に尼の乗ゆきし、竹橋此家をめがけ走り來る、關屋心に審しく、芝崎まではなほ數町の道なるに、早くも歸り來りしと、不斗椽先の葛籠がさに目を止め、さては此笠を忘れしゆる、取戻りしものならめ、彼尼昨夜われにあづけしは確か二百兩あまりの金なり。緣故いふて彼金をかりうけ、寶劍も買ひもどさん、天道貧女が忠節を感應ありて、此金を與へ給へしか、いやさにあらず、尼君も用なき金は持給ふまじ、言出しとて多なる金を貸くれん道理もなし、忠義故には、或は人を害し、或は盜賊となるも例なきにあらず、寧ろ此尼を殺害し、金を奪ひて、主良人の望みを遂げさせまわらし、妾は後にて自害せん、是に越したる良計あらじと、心強太くも急刀ぬきもち後にかくし、折ふし門

邊に昇來る竹橋側ちかく立出て、尼君此御笠を忘れしゆる立歸り給ひしならんと言さまに、おどしの脊うち輿舁に切つてかゝれば、人殺しありとよばひて、竹橋をば庭先にうちすて、狼狽まはりて逃げてゆく。關屋は氣も逆のぼり、南無阿彌陀佛と口に唱名、竹橋簾のうへよりして、柄もくだけよと突通せば、内には女の叫ぶ聲、鮮血手にしたくりけり。關屋はそのまゝ倒れ臥し、涙にくれていひけるは、尼君さぞかし非道の女とおもひ給はんが、是には一席につくしがたき長物がたり侍る。其要なる事のみ申さば、忠義の爲になくてならざる金の才覺、趣舍思案なかば、立かえり給ひしと、昨夜また金多にもちたるとき、妾にしらせ給ひしが、御身の不運みちならぬ事と知りつゝ殺害し、その金かりうけ申すなり。頓て妾も自害して、黄泉とやらにて分説いた

し侍らん、ゆるし給はれ尼君といふのも、奥に洩れもやせんと、側をかへり見つ、竹橋より尼を引出さんと、袖を掴めばこは如何に、墨染ならぬ振袖に、しかも色よきぬひ模様、竹橋のうちよりさも苦しげなる聲ふるはし、さ宣ふは姉上にはおはさずやといふに驚き、簾おしあけ引出せば、思ひもかけぬ妹の白玉、肩尖をつき通され、はや息もたえん有様なれば、あまりの事に涙も出でず、尻居に挫と倒るゝをりしも、母朽葉は立歸り、仔細は垣の外面に聞きし、こは何とせん淺ましやと、白玉を抱きおこせば、關屋も共に取り縋り、此竹橋のうちなるは、たしかに昨夜の尼君と思ひの外、其方はいかなる由縁ありて此所へは來りしぞ、心をどうぞ確にもち、様子語りて聞せよと、さまざまと介抱なすに、白玉漸く顔うちあげ、妾も昨夜より總角主と計り、意

休が所持の寶劍を奪ひ難なく廓を亡命して竹橋に乘來り、松原通りの茶亭にて、その尼君と乗かえしが、さては姉上にも今一トふりの寶劍のことにつき金の入用あるがゆるゑ、御主の爲にはかへられじと、妾を先の尼君とおもひたがへ、この爲體に及びしならん、品こそかはれ忠義は同じ忠義なるに、何妹の一人や二人殺せしとて、歎き給ふことはなし。此寶劍さへわたし申せば、妾は活きて用なき骸、花巷より追手がかゝり、捕へられたら恥の耻、死ぬは覺期のうへなるぞや、とはいふものゝ久しぶりにて母さま姉さまにお目にかゝるを樂しみに漸く逃げて來りしに、もう眼が見えぬ御顔の見えぬが悲しいと、關屋に犇と抱きつく、關屋は手負を抱きかゝへ、おゝ理なり母上もこれにぞや、心を確にもちてたもと、袖くひしばり涙をかくし、さまざまに勦はれ

ど手負は苦しき息をつき、定めて様子は助六君より聞きもし給ひけん、姉さまに別れてより、意休どの、強悪非道、現在甥の側女、早舟どのといふをかきくどき小刀ばりにて嘖さいなむ。其役を妾にいひつけ、いやとあれば是なりと白刃を眼先につきつけられ、魂消るばかりの苦しませつなさ、早舟どのをば漸く其場を落しまゐらせしが、妾は門平に捕へられ、遂に遊女に賣渡され、多くの人のなぐさみぐさ、心に泣いても面は笑ひ、何地の何人と知らぬ男に、一夜は夫のむすびして、雪の旦兩の夕、送り迎ひの憂難、ついねぶたさに寝すぐせば、老杉板にうちたゝかれ、總角ぬしのわびことは、實に地獄で佛とやらん、むなしき空をながめては、姉さま母さま何方に居ます、便聞きたやあひたやと、泣いてばかり居たりしに、御目にかゝりうれしやと思ふ

間もなく死別れ、よくく淺きえにしごと、せきあげく泣きにけり。朽葉は關屋を取てひきよせ、昨夜其方が獨言に、人は正直なれば、神や佛のめぐみも深しといひたる言葉に引替へて、いかに忠義なればとて、人を殺して金取らんと非道な己が心より、現在の妹を殺し、己は恥ともおもはずや、其方ばかりの妹にて、此母が娘でなきや、白玉を活けて戻せ、かゝる事と知るならば、助六君の詞にしたがひ、昨夜廓にたづねゆき、白玉がわらひ顔、熟と見てをかぬが残り多い。さあ關屋白玉をかへせもどせと老の周諄、かよはき力にうちたゝけば、手おひは其手に取すがり、是喃母上、妾先にもいふごとく、寶劍を盗みとり、剩へ廓を走り主の眼をかすめたれば、忠義とは言ひながら此身も盜賊の悪名は逃れがたく、姉上の手をかりて、天の罪なはし給ふと思

ふときは、恨むる事も更になし。まだ此上に何等な、つらい悲しい憂目にあひ、他人の手にて死なんより、姉さまの手にかゝり、死ぬのが妾はうれしきゆゑ、先のやうに泣きたるはうれし涙に侍るなり。逆なることながら、姉さま母さま中ようして、香華手向給はるが、わらはが未來の頼みぞや、總角ぬしはいふに及ばず、助六君專平どのによしなふ傳へ給はれと、泣くをかくせる苦しみに、疵口より鮮血ほとばしりいと哀れはまさりける。關屋今はたまりかね、刀逆手に自害せんとす折しも、思ひもよらぬ一室より主の專平走り出で、關屋が刀もぎはなつ、南の方の柴折戸荒かにおしひらき、助六總角かけよりて、總角は涙ながら白玉を抱きあげ、是れ喃先よりのあらましは、残らずあれにて聞きつるぞ、不便の者やいたはしの光景やと、歎き悔めば白

玉は、いと苦しげなる聲はりあげ、總角さまかといひたるばかり、早悶絶るべきありさまなり。助六も目をしばうち、寶劔を盗みて花巻を出でたる小女に似氣なき彼が忠心、感ずるに餘りあり。まつた總角はもの詣でといひなし、われと共に廊を出で、余の人をば金をあたへて、某のところにて待せをき、二人來かゝる庵の外面、白玉が手負し様子、仔細あらんと走り入らんず總角をおしとめ、一伍一什は聞きたるぞ、忠義ゆゑには人を害し、捨身もいとぬ關屋が赤心、嗚呼勝負なき姉妹の忠臣かゝる不幸を得ることは、宿世つたなき故なるべし、憐むべし白玉ははや、終焉もほど近からん、總角さる方より得つる金にて、今朝主より買戻せし、白玉が年季證文、彼がためには則ち血脈あたへて成佛さすべしと、關屋に證文わたしければ、歎きのうちにも喜びて、

白玉の手に握らせ、耳に口を近づけて是こそ御身が年季證文、心残さず西方淨土、彌陀の御國に赴くべしと、大聲あげていひ聞せば、はや物はいひかねて、漸く掌をうち合せ、人をふしおがみ、微笑ふが暇乞ひ、草葉の露の白玉は消えてはかなくなりけり。朽葉關屋は正體なく、今朝鳥なく音の耳にさはりしも、御身の斯うなるしらせなりしか、脊丈は大きうなりつれど、此面の細りしは、多く苦勞をせしゆるならん、只一言姉よ母よといひてくれと、狂氣のごとく泣叫ぶ、歎きのうちにも助六は、白玉が持來りし寶劍を取あげて、小女が忠義空しからず、一振は手に入りたり。今一振を取かえし、雌雄の劍そろふ時は再度氷上の家をおこすべき時至れりと喜ばば、專平いひけるは、悲歎にせまりて一大事をいひもらせり。過刻に見なれざる老人、蛇形

丸の寶劍をもち來り、二百兩に賣るべしと申せしゆゑ、奥の一ト室にまたせおき、某は右の一事君に知らせまゐらせんと、走り出づるさまにもてなし、道より立歸りて、彼老人を殺害して、寶劍を奪ひ取らんと思ふ折しも、女房關屋が金をもちたる、昨夜の尼とおもひたがへて此爲體、彼老人を引出し、事の實否を糺さんと立上れば、助六はおし止め、わが閑居と知りつゝも、劍を賣らんと來る曲者、これにも深き仔細ぞあらめ、彼はうち棄てをきたりとも、逃走らん理なし。さるにても此家に宿りしは、大徳なる尼なるべし、運つよくも此難をのがれるかなと云ひければ、北の方なる柴折戸の外表面にて、強ち妾が徳あるにあらず、これにも又長き由縁ありと、立居るは彼尼なりければ、關屋はいと面なげに見えにけり。尼も涙にくれながら、白玉が死骸に

うちむかひ、頓生菩提南無阿彌陀佛と、ねもごろに回向なし、さて言けるは知らざる事は是非もなく、只よそ事而已かたり居たるが、則ち此所こそ助六君の閑居にてありけるか、逢ひまゐらすは初めてなれど、かねて聞きも及び給ひけん、妾は御兄曾根太郎君の側女、早舟にて侍ると云ひければ、助六はじめ人人もおもひかけぬ事にしあれば、少時呆れて言葉をも出さず、早舟重ねて言ひけるは、此家に来りし老人は、白酒あきなふ十兵衛といふ者なり。妾如此くの事にて、下總國大和田といへる所にて、寶劔を買ふべき契約なし、昨日當所へ來りしをり、日も暮れければ此家に宿り、今朝十兵衛が家をたづね、芝崎村へ行きつれど、十兵衛は花川戸朝顔の専平が許へゆきたりと、隣家の老人が物語り立戻りて聞きあはすれば、朝顔の専平とは、昨夜宿り

し此家なり。こは不思議なる事かなと、立寄る戸口にうかゞへば、今朝竹橋に乗替へたる雛妓が斷末魔、様子ぞあらんと立聞けば、おもひきや此家は則ち助六君の隠家にて、此小女こそ侍女綾瀬なるべしとは、直ぐにかけいり、暇乞もせまほしく思ひしが、妾此場に来るなら、關屋どのも面なく、殊に何へだてなくうち語らひたる綾瀬どの、久振にて逢ふなれば、いと歎きをそゆる道理と、こゑなき冬の蟋蟀、壁にとりつき泣居しぞや、房州にて意休が茶毒に陥りて、妾も遂に殺されんとなしけるをり、綾瀬どのの情にて、辛き命を助かりしが、跡にて聞けば彼意休にとらへられ、殺されしとの風説ゆる、其日をすぐに忌日として、香華手向けぬ日ともなく、されば今朝逢ひぬるをり、綾瀬どののかと問はんとせしが、似たる人よと思ひ直し、言葉かけぬが御

身の不幸、斯くいふ事と夢ほどなりと知るならば、此竹橋に乗かへず、
 關屋どのに妾が殺され、先年命を助けて給ひたる、その恩を報はんも
 の、浮世に用なき身は恙なく、苔の花を吹散らし、一度ならず再度ま
 でも、妾が命にかはりしは、如何なる宿世の約束にや、未來は一蓮諾
 生ぞと、さめくるところ泣きにけり。關屋は漸く涙をおさめ、さては
 尼君はかねて聞き及びたる早舟さまにありけるか、曾根太郎君の寵愛
 ありし、御主もおなじ御方を、知らぬことはいひながら、殺害しま
 ゐらせんとしたるを、おもはずも白玉が御身がはりにたちたるは、
 妾が爲には妹ながらも命の親、是喃う白玉、其方が死にたる故にこそ、
 妾は主殺しの悪名を逃れつれば、犬死にてはあらざりしよと、活きた
 るものにいふごとく、朽葉も共に又かえりやらぬ周諄して、前後不覺

に見えければ、早舟かさねて、さな歎き給ひを却つて亡靈の迷ひを誘
 引とやらん、法の書にもしるしあり、妾も彼寶劔を買ひえて後、助六
 君の在家をたづね、わたしまゐらす心なれば、異なるに似つれども、
 關屋どのと思ひはおなじ二百兩、彼老人に渡し寶劔を取戻さんと立上
 れば、總角少時とおしといめて、心せき給ふをりから、つぎ穂なき問ひ
 ごとにはあれど、白玉が平生ものがたりに、早舟さまと申す御方由縁
 ありて、姉上ともおもひ侍り仕へまゐらせしが、顔容は云ふも更なり、
 ものいひ給ふ所まで此總角に似たりとは物かは、直に其人のごとしと
 いひつる故、先に御名を聞きしより、歎きのうちにも熟御顔見まゐら
 すれば、實にも彼が言葉に違はず、恰も鏡に向ふ心地なしぬ。何地何
 方にて生れ給ひ、年は何歳にならせ給ふと問ひければ、人とはじめて

心づき、二人の顔をうちまもるに、雪をあざむく素服と色める小袖と
 たがふのみ、若しおなじ出たちと做さばいづれを總角といひ、いづれを
 早舟なりとわかつべうもあらず、總角かさねて、人の名を聞くとさは
 必ずわが名をなるとかいふ、恥かしながら妾は、捨子にて侍る。さ
 れば早舟主にも若し親類血族ならんもしるべからずと、忙はしきうち
 にも問ひまゐらするなりといひけるに、早舟も不審しく、御身棄てら
 れつるをりは當歳にて、紫の紐一すぢその身にそへてはなかしかと
 言ければ、總角大に驚き、守袋のうちよりも、紫の紐取出し、捨てつ
 る人の形見なりとて、妾を拾ひ取りたる翁が寝ものがたりを、いと幼
 き時なれど、おぼろげに覚えあり、是こそ鎧につくる總角といふもの
 なるよし、されば妾が名とよびなし侍る、夫をしろしめす尼君は、も

しや妾が姊うへなりやと、膝をすゝめて事を細やかに問ひあきらめん
 とす尼は涙をはらくと落し、妾も御身とおなじ捨子にて、舟のうちに
 ありしかば、名は早舟とかはれども、かはらぬは此紐とこれも守袋より
 取出し、結びあはする紫の紐には少しも長短なく、總角とこそなりに
 けり。人ともなみならず驚き、さては姉妹にておはせしか、不思議な
 る御對面にてありけるよと言ひければ、助六眉をひそめ、かゝる證據
 ある上は、姉妹にまぎれあるべからず、されども二人の顔を熟見る
 に、年のほども同じさまにて、いづれのかたや姊ならんと言ひけるを
 り、一室のうちより聲高く、其仔細は此翁がかたり聞かせ申すべしと
 立出づるは、則ち十兵衛にぞありける。

五 親子之奇遇



十兵衛切腹して
 早舟徳角も
 日本長とくと
 みのる
 〇のてんてんてんてん
 んとおんてんてんの
 ちんてんとくまへ

斯くて十兵衛兩人に向ひ、御身等のすてありしは、二荒山の麓ならめ
と問ふに二人聲を等しくなし、然なりと答ふ。十兵衛は點頭きて、彼
寶劍を抜くよと見えしが、腹へぐざと突きたてたり。こは何ゆゑの自
害ぞと、人々かけより勦はれば、十兵衛苦しき息をつき、御身等二人
は學子にて、此十兵衛が娘なりと、聞くより兩人かさねて驚き、あま
りの事に涙さへ出やらず、右と左に取りすがり、其父上が何故ありて、
かく御生害にはおよび給ふと問ひけるに、十兵衛は眼を見開き、われ
昔は波多野佐々之丞利長といふ武士なりしが、往永享のころ、主人足
利左兵衛督持氏、其子八幡權太郎義久、下野國より義兵をおこし、安
房國の城主、里見家基と合戦なせしが、持氏義久勝利を失ひ、下野國
報國寺の境内にて、御父子とも生害におよび給ふ。われも黄泉の御供

と、刀に手はかけながら、思ふことありてその場をたちのき、浪人の
烟のしると、軍用金を奪ひ早瀬村に忍ばせ置きたる、懐胎の妻櫻戸を
將て、二荒山の麓をよぎるをりしも、櫻戸俄に蟲氣づき、二人の女子
を産みおとし、彼は其所にて死去りぬ。所詮男の手ひとつにて、赤子
の養育思ひもよらじ、後の證據となりもやせんと、總角の紐をそへ二
人ともにすてつるが、親はなけれど子は育つ、世の諺にちがひなう、
よく健かに成長しと、悲歎の涙とよめかね、女めかしく泣きにけり。
總角早舟は何と思ひわくかたもなく、數行の涙袖にあまり、唯ひた泣
きに歎きければ、助六は側近く來り、いかに十兵衛以前の名は、波
多野佐々之丞利長どのとやらん、足下蛇形丸の寶劍をもちて、此家に
來り、まつた總角早舟等が父なりと名乗り、自害して果て給ふは、小

子ふつに合點ゆかず、何等の由縁ぞ詳に語り給へと問ひけるに、十兵衛はうち笑ひ、生は得がたく死はやすし、縁故なくて腹切るべきか、わが兄波多野村次郎利久といふ者、足利里見合戦の刻、御身の父、氷上東彌太に討たれければ、その無念忘れかね、せめて東彌太を一ト太刀恨み、村次郎が幽魂をなぐさめんと、われは先にいふごとく自殺なすべき其場を立退き、密に房州へ赴き、便宜をうかゞふそのうちに、東彌太どのは病死なし、意休は伊吹何某が實子にて、孤となりたるを御身の祖父彼をあはれみ、氷上の家に養ひたれば、東彌太が血脈にあらず、せめては兄への分説に、瀬次郎助六曾根太郎、兄弟三人討たんものと、思ひしことも齟齬、二人は非業の死を遂げて、残るは助六只一人、われは老ひたる雲雀ばね、御身は聞ふる丈人なれば、尋常の立

合思ひもよらじと、彼軍用金をもて、此寶劔を買求め、これを則ち餌となし、卑怯とも未練とも、笑ふ人は笑ふべし、賺よつて討取らんと、此家に来り首尾を聞きぬれば、仇人とねらふ助六が、いひかはしたる總角は、わが血をわけし娘なり。近頃御身を異名して、花川戸の助六とも、總角の助六ともいふならずや、若しも御身に怪我あらば、アレ助六は殺されつれど、命おしさに桂着て、紅粉を粧ふは、薄情なる總角なりと、巷説となるときは、いかに遊女なればとて、活きて此世にあるべきか、仇人を討てば娘も殺し、討たねば兄への分説なし。おもひに絶えかね此生害、不便と思ひ給はらば、總角と二世までも、そひ遂げて給はるが、千部萬部の經よりも、此十兵衛が弔ひごと、助六をふしおがめば、總角は無益不問語りより、妾が種性をいひいだし、

かゝる歎きを得ることは、いかなる過去の約束ぞや、父上といふ事を
 努しらぬ昔こそ、今は戀しう侍ると打泣くに、早舟も諸共に、いつぞ
 や妾が庵にて、門平に捕へられし、危急をすくひ給はりしも、つきせ
 ぬ親子の縁なりしが、今日はいかなる悪日にて、綾瀬どのといひ父上
 まで、死わかるゝが悲しやと、くやみ涙にむせかへれば、關屋朽葉專
 平も、いと理におはすなりと、袖をしぼらぬはなかりき。木石ならね
 ば助六も、しばしく臉うちたゞき、子をもちて親の恩をば知るなりと、
 世の常言も宜なる哉、今まで仇人をつけねらひし、助六に手をあはせ
 たのみ給ふ總角が身の上いかで見すて申すべき。幾世もかはらぬわが
 妻なりといふに、十兵衛莞爾と打笑み、あらよろこばしや心やすし、
 夫聞かうへは思ひをくこと更になし、總角早舟いづれもいとま申すな

りと刀一文字に引きまはし、やよ、總角仇人の娘と知つゝも、妻の結
 びをなし給ひし、助六どのに謝せんには、經延けれど此寶劍、婿引出
 にまゐらせよと、刀を抜けば枯木のごとく、撞と倒れて息絶えたり。
 二人は父を失ひつ、朽葉は老ひて子におくれ、關屋は現在妹を殺し、
 つながる縁の助六專平、歎きはつきぬ六人が涙、ほとりなる角田川の
 水もまさるべう見えにけり。かゝるをりから庵の外面に人の來る氣色
 なすにおどろき、早舟その人を見るに、近頃十兵衛とともに庵にやど
 り、門平をからめゆきし、旅の士にぞありける。是則ち別人にあらず、
 先年義實公より寶劍二ふり詮議仕出すに於ては、本領安堵たるべき御
 墨附を助六方にもち來りし、里見の老臣、初鹿速水之助なり。助六忙
 はしく上坐にすゝむれば、速水之助いひけるは、先頃不意夫なる早舟

どの、庵にやどり、如此くこの事にて意休が白齒者門平を搦めとり、是幸とかねて豫め君にもしろしめせし事なれば、意休が姦惡を責め問ひしに、案にたがはず、三人の兄弟をなきものにせんと、蛇形丸をうばひ曾根太郎瀬次郎に自殺をとらせし事、および時節をまちて里見の家をも押領せんす計策まで、詳に白狀におよびし故、門平をば疾や彼地にて刑罪なしぬ。意休は元來伊吹某が孤なるを、汝が祖父彼を養子となしつるなれば、東彌太が實の舎弟にあらず、此度義實公命を給ひ、仲父甥の縁を切らしめらるゝのあひだ、意休當地にあるこそ幸ひ、急ぎ彼を討つて寶劔を取り戻すべき嚴命なり。さなき時は房州にて、梟木にかけらるべき意休なれば、汝に討たるゝも却つて彼が幸ならんといふに助六大いに喜び、あらたに主君の命をもて元の他人とな

し給はらば、意休を討たんこといと易かるべしと、専平關屋らが赤心、總角白玉が計ひにて、寶劔を取戻せしこと、および早舟二百兩の金をもて、此家にやどりしこと、十兵衛が切腹の首尾、おちもなく語りければ、速水之助も感じ思ひ、かゝる上からは疾意休を討つて房州に来るべし、某よしなに執なしせん、われは此由縁義實公へ申しあげんと房州へこそ歸りける。助六は喜びいさみ、暮れなば花巷に赴きて、兄の仇たる意休を討ち、再度着なす錦の袖、故郷へ歸るも近きにあり、餘波つきせぬ親子の別れ、宜なりとは思へども、總角は家長の待わびん、疾く柳巷に歸るべしとすゝめければ、早舟は二百兩の金取出し、總角主の身の代と渡せば、取つて押しいたゞき、此金給はるうへからは、花巷にあるも今宵限り、意休には酒すゝめ、曉頃にかへすべし

討ちもらし給ひぞと、手はづを定め立出では出でながら、又かへり見
る椽先に物いふごとき父の死がほ、ねぶれるごとき白玉が姿に、思は
ず立戻れば、未練な女と隔つる助六、無常を告ぐる寺の、鐘もかす
かに響きけり。

六 あだうち

其夜も意休は三浦屋の樓にありて、總角が難面をこらし、別に遊女を
むかへ、舞ひつ諷ひつ磅き、夜も五更の頃ほひ雛妓雑戸を誘引ひ
娼樓を立出でけるが、奇なる哉路頭より鬼火瓢蕩ともえあがり、陽炎
のごとく去りし瀬次郎がすがた行先にあらはれ、怖しげに意休が顔を
うち見やれば、流石の意休も歩をうつす事あたはず、少時躊躇けるに
雛妓雑戸は彼怨鬼つゆばかりも見えざれば、其由縁をしらず、意休君

には何をうちながめて、彷徨給ふと問ふに意休はじめて心づき、此方
の道は障る事あれば、彼方の道より行かまじと立歸れば、花手桶を手
にさげつ珠數爪ぐりてしづくと歩み來る男あり。花巷に似合しか
らざる出たちと、其人を見るに是則ち曾根太郎なり、意休は兩人の怨
鬼にうちはさまれ、惘然として居たりしが、詮術なう人々に向ひわれ
思ふ事あれば、御身等はより立戻るべしといふに、雛妓雑戸は、又明
日の夜こそ來ませと、口くになげの言葉をいひつゝも歸りぬ。意休は
怨鬼をはたと睨まへ、おのれ曾根太郎此世にありしうちだにも、わが
姦計におちいり、現在の弟に殺されつる狼狽者、況んや幽魂となつて、
怨むともおよばざる事なりと、佩刀を抜きて切りはらへば、煙のごと
く消え失せけり。又後をかへり見れば、彷彿と人の徨彷徨あり、汝瀬次

郎今曾根太郎に言ふがごとく、兄を殺せし不覺者、長言云はんは無益と切つてかゝれば、姿はさらに消えもやらず、手ばやく刀ぬき合せて丁度うけたり。意休うちおどろき、熟見るに思ひもかけぬ助六なり、助六意休に向ひ、此度閑寺門平が白狀にて、里見の家を押領せんず、御身の謀叛仔細にあらはれ、二人の兄の仇たれば、仲父甥の縁を斷ち、われに討ちとりまわれよとの、義實公の嚴命なり、心よく勝負とぐべし。と高らかに言ひければ、意休呵とうちわらひ、門平が白狀にて我謀叛あらはれしうへは、つゝみかくす理なし、われ二人の兄の仇人といへる證據あらば、仲父甥の縁をたち、汝に討たれて得せんが、此返答ありや疾くいへ聞くべしと息まきて言ひければ、助六莞爾と打笑み、御身今更に人なき街上にて、狂人のごとくいへる事を聞けば、

わが奸計に陥り、現在の弟に殺されたりと、曾根太郎を嘲けり、われをして瀬次郎なりと罵りしを、疾く忘れ給ひしかといふに、意休愕然となし、さてはわが姦計をわれと云はせん其爲に、假に兄弟の怨鬼姿をあらはせしものならめ。斯なる上は何をかつゝまん、兄弟二人に自殺を取らせしは、いかにも此意休なり、不便なれど汝をもかえりうちになすべしと切つてかゝれば、助六さもありなんと、身を閃し、丁どたる白刃の音は高樓の琴に合し、光たる劍のひかりは辻行燈の火影にかゝやき、少時がほど切りむすびしが、助六手練や増りけん、遂に意休が肩尖ふかく切込んで、大地に墮と倒るゝを、乗かゝつて止め刀咽元を貫きけり。かくと誰か告たりけん、人殺あり人殺ありと呼びて、棒乳切木を引提げて、數多の人はせ集りければ、總角は三浦屋の



總角語物
 往の機
 きの

たかどの
 樓より、此光景を遙に見つけ、周章ふためき轉び出で、助六を桂の
 裾にしのばせ、これは某の國司より、御免を蒙りたる仇討にて、辻切
 り狼藉のやからにあらず、疾く退くべしと言聞かせど、なほ總角をう
 たがひ、雑戸の大勢めぐりを圍み、それかれと犇めきければ、總角腹
 立しき面持して、あなさはがし譬、仇討といひたる事空言にもせよ、
 身不肖なれども三浦屋の總角、その振り上げたる棒のさきが、僅なり
 とも此總角にあたりなば、花巷は暗夜に等しかるべしと、眉じりひき
 あげ言放てば、流石花魁の言葉にやおそれけん、人を殺しつるもの
 は、此所にはあらず、又異所をたづぬべしとて逃去りぬ。總角少し心
 おちる、助六を誘いて三浦屋に歸りけるが、三浦屋の家長は、總角よ
 り二百兩の身代をうけおさめ、縁故を詳に聞きをきし事なれば、助六

が本意を遂げたるを大に喜び、花川戸に人を馳せて、一伍一什を告げ
 しらせ、盃をめぐらして助六を説き、夜あけぬれば、花巷の餘波と總
 角は、數ある小袖手道具に至るまで、みなそれぐにわかちあたへけ
 れば、總角を羨まぬ妓女はなかりけり。斯く後助六總角は、專平關屋
 朽葉とうちつれ、不日にして安房國朝夷郡白濱に至り、里見太郎義實
 公に謁し奉り、二振の寶劍を提げければ、義實公人との赤心を感激ま
 しく、助六には本領に増して知行を給ひ、專平も御侍のうちへ召加
 へられければ、枯魚斗水の活を得るごとく喜び斜めならず、殊に助六
 總角は中いと睦じく一男二女を生めり、早舟は助六が館のほとりに庵
 をつくり、心にかゝる雲もなく真如如法の月をながめ、遂に大徳ある
 女僧となり、八十の齡はて、大往生を遂げにけり。されば今に至りて

曲子こかたにうたひ、戲場しばらにあやつられ助六すけむすく總角あけまきが昔むかしがたりは、かゝる事ことに
なんありけると、他の空言くうげんを嘲あざけり、わが空言くうげんを吐はくも、勸善くわんぜんの一助いっすけ
となれと老婆心うはしんなりけり。

總角物語 大尾

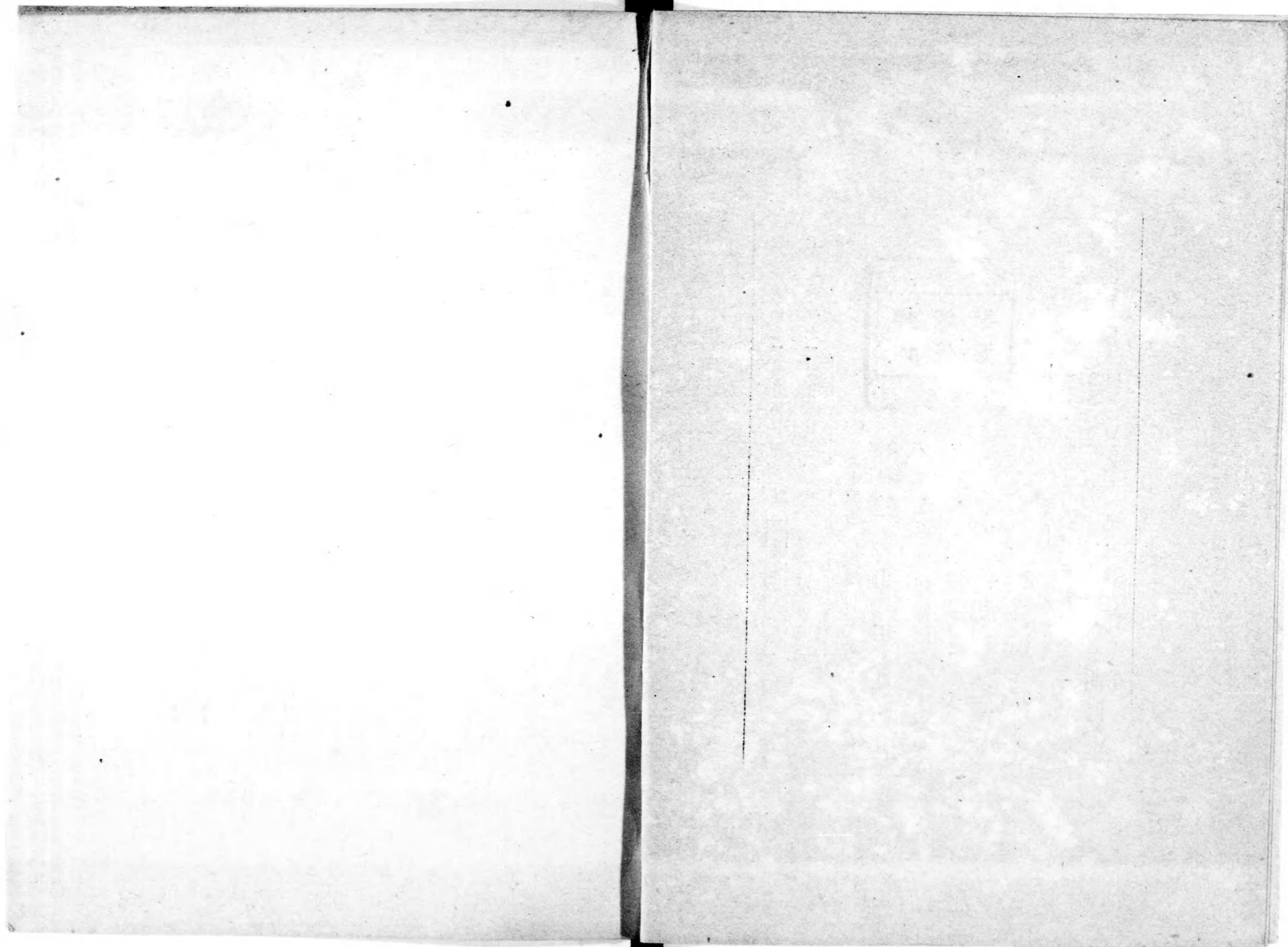
大正六年十二月廿五日印刷
大正六年十二月廿日發行

袖珍繪入文庫第八卷
定價金九拾錢

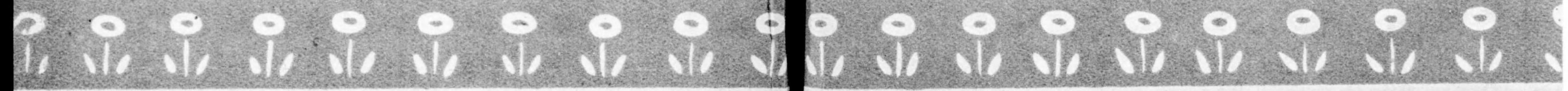
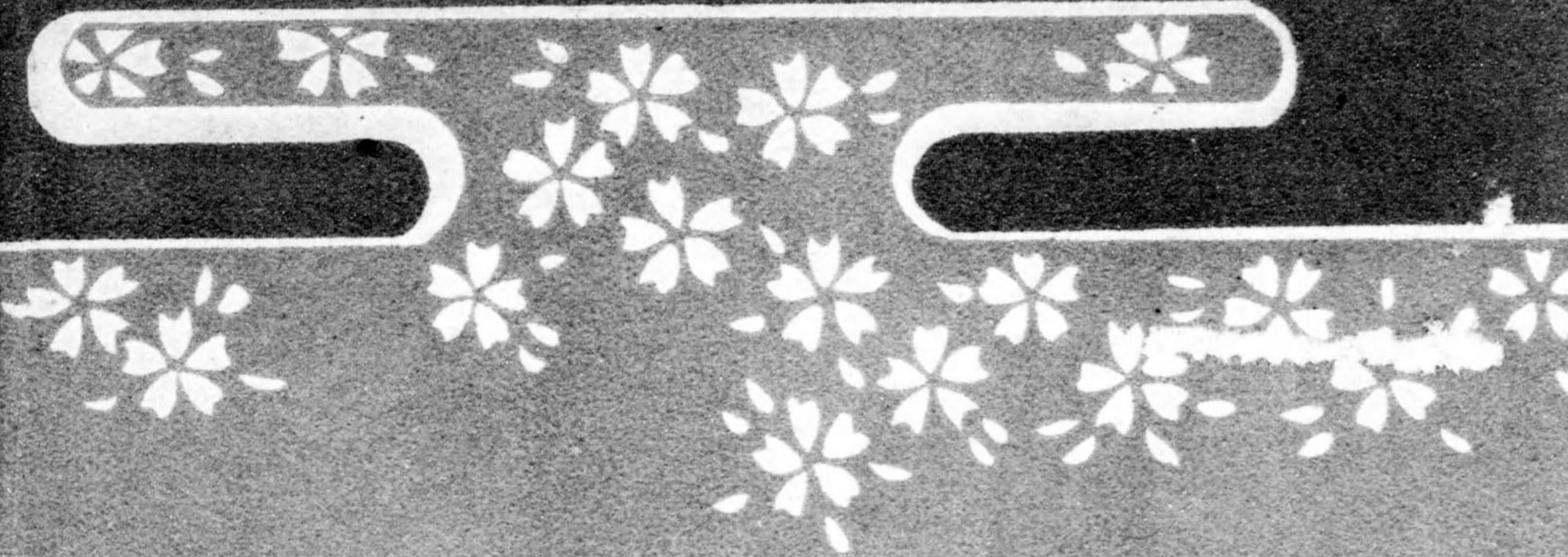
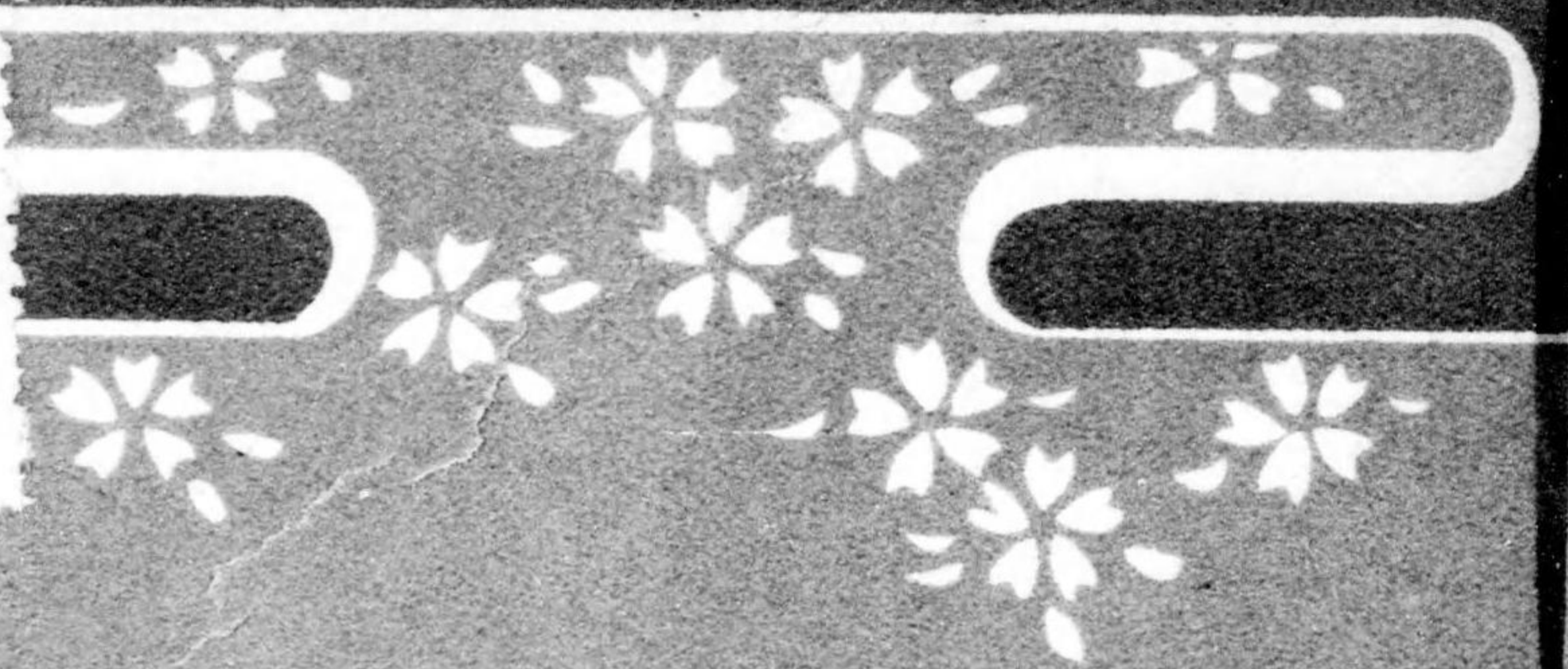


編輯兼 發行者 山田清作
東京市牛込區市谷富久町八十四番地
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社

發行所 東京市牛込區市谷富久町八十四番地
電話番町三四六一
振替東京三一五一八
繪入文庫刊行會



1178
1254



終

